
宵闇奇譚 —幕末異聞—

辰巳 結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵闇奇譚 ―幕末異聞―

【Nコード】

N1212Y

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

後に江戸末期と呼ばれる時代。

「尊皇攘夷」に沸く日の本の活気とは別に、「人にあらざる者」…
…「闇の者」と呼ばれる者達が跳梁跋扈する京、島原。

人に仇為す「闇の者」と相対するは、島原の誇る「闇の華」。

置屋のお母さん、百花。その置屋に住まう芸妓、水菊。置屋の男衆、銀彌。そして水菊付きの禿、あやめ。

新撰組隊士、永倉新八をも巻き込んで、彼らは「闇の者」の脅威を払う。

「人から堕した闇の者よ。貴様の止まった時間は、死を以って再び動かすと良い」

この物語は当然ながらフィクションです。実際の人物、団体とは一切関係ございません。

その1：文久3年、葉月（前書き）

皆様。

この度は当作品をお目に止めて頂きまして、誠にありがとうございます。

当作品にお付き合い頂くに際して、二つほどお心に留め置き頂きたいことがございます。

まず最初に。

当作品は、キーワードにもあります通り、「エセ歴史物」でございます。

歴史上の出来事などに絡めた物語ではございますが、史実とは微塵も関係ございません。あくまでファンタジーですので、「そういう物だ」と思ってお付き合い頂けましたら幸いです。

次に。

この作品は、自作の短編、「花街の闇」（N5368X）の続編に当たります。

当作品からもお楽しみ頂ける様努力は致しますが、出来ましたらそちらからお付き合い下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

それでは、皆様の貴重なお時間、当作品に頂けましたら幸いです。

その1：文久3年、葉月

文久3年、ジイジイと蝉が鳴き、蒸し暑さも一層酷く感じられる葉月も半ばの昼下がり。

京は島原の片隅に存在する揚屋、「縁屋」^{えにしや}から少し離れた場所にある置屋^{おきや}では、1人の青年がぐったりとした様子で縁側に寝そべっておりました。

その脇では芸事帰りらしき芸妓^{げいこ}が困ったような顔で彼を見下ろし、更にその後ろには彼女付きの禿^{かむろ}の少女が冷たい視線を青年に送っております。

「あづいゝ、死ぬゝ、マジ死ぬゝ」

「銀彌^{ぎんや}はん、毎年それ言うてはりますなあ」

「だってよお、水菊^{みなぎく}姐さん。本気でこれ死ねるって。何この蒸し暑さ。京はデカい蒸籠か？」

青年の名は銀彌。齡は17、8と言ったところでございましょうか。銀色の髪は結われずバツサリ短く切られており、同じ年頃の青年に比べて背は飛びぬけて高いように思われます。普段なら鋭く睨みつけるような目付きをしているのでございますが、今は暑さ故にその目は薄く開けられているだけでございました。

彼の仕事は置屋に住む芸妓や舞妓達の着付けの手伝いなどの力仕事や、用心棒が主。最近では尊皇攘夷を掲げる不逞の輩達の横暴かつ身勝手な要求から、彼女達を守るのが主となりつつあるのでございます。

そしてその脇に佇む芸妓の名は水菊。齡20そこらと言ったところでございますが、その凜とした佇まいとしなやかな仕草、そして顔に浮くあどけなさの残る笑み故、島原でも名の通った芸妓でございます。無論、芸も一流と呼んで差し支えない腕前で、舞うも良し、三味を弾くも良し、話も上手と、彼女に懸想する男性は数多くおります。

そんな彼女の方は、芸妓の技なのでございましょうか。酷く蒸し暑いと言うのに、その顔には汗の玉1つ浮いてはおりません。

彼女だけでなく、島原にいる芸妓や舞妓は、皆顔に汗をかかぬ術を知っております。それは、汗をかけば施した白粉や紅が流れ、みっともないが故に編み出された技と言っても良いでしょう。

現に水菊の脇に佇む禿の少女も、漆黒の着物に身を包んでいると言うのに、全く汗をかいておりません。

ですが、顔に浮かんでいるのは不機嫌その物。転がる銀彌を見る目も、どこと無く忌々しげな物のような気がいたします。

彼女の名はあやめ。年齢は10に届くか否かと言ったところ。ですがその愛らしい顔立ちと、共にいる水菊の可愛がりようから、末は水菊と同等、もしくはそれ以上の芸妓になるであろうと、世の男性から評価されております。

そんな彼女が、顔を顰め、睨むように銀彌を見下ろす様は、間違はなく普段は見る事の叶わぬ光景でございましょう。

彼女はすつと水菊の前に出ると、横たわる銀彌に向って歩を進め

……

「こんな所で寝るな。通行の邪魔だ」

言いながら、彼女はそつと足を上げると、寝そべる銀彌の頭にその足を乗せ、ぎゅうと勢い良く踏みつけたのでございます。

おまけに乗せた足をグリグリと躡^{にじ}るではありませんか。

床に頭を押し付けられる形となった銀彌は、あやめの体重がかかる頭を無理矢理上げると、普段の精悍な面差しからは想像がつかない程、情けない顔で彼女を見上げ、抗議の声をあげたのでございます。

「ちよいちよいちよい！ 何でそんな不機嫌？」

「決まっている。暑いからだ。私はそれを我慢していると云うのに、貴様と来たらうだうだうだと。……もういつそ禿げる。見ていて暑苦しい。何なら私がその鬱陶しい毛を刈ってやる」

「酷えっ！ オレってば超短髪なのに！？ これ以上刈られたら丸

坊主なんだけど！」

やかま
「喧しい」

「むぎゅう」

汗をかいていないだけで、暑いと感じていない訳ではないのでしよう。

銀彌に向って心底苛立たしげにそう言うと、あやめは更に体重をかけるのでございました。

とは言え、所詮は10そこらの童女。わらしめ 銀彌には然程大きな痛手とダメージはならないのでございますが。

そもそも京は、三方を山に囲まれた盆地でございます。斯様な地形故に、日の光によって生まれた熱は山に阻まれ逃げ場を失い、京に留まるのです。唯一開けている場も、風の吹き込む「南側」。つまり、風は熱を孕んだ空気を運び込みこそすれ、留まる熱気を追いつ出すような事はないのです。

同様な地形には、かつて源氏が幕府を開いた鎌倉がございますが、鎌倉との大きな相違は海の有無。南方に海を持つ鎌倉とは違い、京には海がございません。それ故、海風で冷やされると言う事も無いのでございます。

これが、「京が暑い」と言われる所以。その事を存じているのでしよう。銀彌は既に抵抗する気も失せたのか、あやめの為すがまま、ぐりぐりと頭を蹴られつつ、呻くように呟くのでした。

「おかしいだろ京の地形。何でこんなトコに都なんて作ってんだよ馬鹿じゃねえの昔の偉い奴」

「それに関しては同意してやるが、ここにいる以上は慣れる。貴様何年この京で生活している」

「……あやめちゃん、言葉遣い。せめてお部屋に帰るまでは、気いつけんといけまへんえ？」

彼らのやり取りを微笑みながら見ていた水菊は、微かに困ったような口調でそうやんわりとあやめをたしなめられたのでございます。

その言葉で、ようやく自身の口調が禿らしからぬものであると気

付いたのでございましょう。あやめははつとしたように己の口を押さえ、しょんぼりした様子で水菊を見上げると、銀彌の頭から足を下ろして深々と頭を下げたのでございました。

「すみまへん、お姉さん。……銀彌はんがその大きな図体で廊下を塞いでいてはるのが、あんまりにも邪魔どしから、つい」

遠目から見れば綺麗な笑顔を浮かべているようにも見えましようが、近くに立つ水菊の目に映るあやめは、全く笑っていない目で銀彌を見下ろし……いえ、「見下し」ながら、答えを返したのでございます。

そしてその顔は未だぐつたりと床の上に横たわっている銀彌の目にも映っているのでしょう。恨めしげな表情であやめを見上げ、ううと威嚇するように低く唸るのです。

しかし2人の女性はそんな彼の視線を軽く流すと、そのまま己の部屋へと戻って行くのでございました。

ここで少々、今の京の情勢をお話させて頂きます。

この文久3年より遡る事6年の、安政5年。時の大老であらせられた井伊直弼公の判断により、3代將軍徳川家光公の御世より続いた「鎖国」が解かれ、欧米列強が次々とこの日本に入ってくるようになりました。

しかしながら、人は急激な変化に戸惑うもの。

幕府や一部の藩は、変化を受け入れ、そして自らも外に出て新たな変化に対応すべきと言う「開国」を唱える一方、朝廷や開国を受け入れられぬ藩は外来者である欧米列強を追い払い、今まで通りの平和を維持しようと言う「攘夷」を唱え始めたのでございます。

「攘夷」とは「夷を攘う」……即ち、「異民族を追い出す」という意でございます。

この攘夷を特に声高に掲げておりましたのは、長州藩でございました。彼らは「尊王攘夷」を掲げ、朝廷を取り立て、朝廷の許可無

く「開国」に踏み切った幕府を許すなど公言しておりました。

一般に「尊攘派」と呼ばれた彼らは元号が文久へと変化した頃から、「尊王」……即ち朝廷重視の観点故なのか、続々と帝がおわす京へと集結し、「天誅」を称して、「開国」を唱える者をはじめ、開国派ではないが尊皇攘夷にも「同意しない」者達を、暗殺、あるいは脅迫していたのでございます。

特にこの文久3年に入ってから、その動きがとみに活発になり、過激な思想を持った志士達が京の街を我が物顔で闊歩する有様。

奮うのが弁だけならば害はございませんが、如何せん彼らは弁だけでなく刀まで振るう始末。氣に入らなければすぐさま刀を抜き、刀を……そして力を持たぬ女子供まで斬ると言う暴挙。

帝のお膝元でありながら、京の治安は酷く悪化しておりました。

そんな折、文久3年弥生、幕府の命によって京の治安維持を任された集団がございました。

彼らの名は「壬生浪士組」。元は別の目的で江戸から京へと上洛した浪士の集団でございましたが、この度は割愛致しましょう。

彼らは、京の町……特に人が集る祇園や伏見と言った繁華街を見回っては、先に述べましたような強硬な尊攘派志士……俗に不逞浪士と呼ばれる者達の捕縛を主な仕事としておりました。

しかし管轄が繁華街と言う、人目に付きやすい場所であつたが為でございますうか。浪士組の仕事は「捕縛」を主としているにも関わらず、町の人々の間では不逞浪士と変わらぬ「人斬り」、「壬生狼」と呼ばれて恐れられておりました。

しかしながら、いつの世も治安の乱れはそう簡単には正せぬもの。浪士組がいくら不逞浪士を捕縛しても、京の民の犠牲は減る事はないでございます。

天誅による暗殺、恐喝、そしてそれに便乗して行われる商家への押し借りや辻斬り。跳梁跋扈する者達は、未だ京で凶刃を振るい続け、そして京の民の心に恐怖と不安を植えつけ続けておりました。

そしてその恐怖の一端は、この島原にも深く根付いておりました。

特に、文月の末から起こっている「刺殺事件」には、島原に住まう芸妓達も……そして見回っている浪士組の面々も、頭を痛めておりました。

「はああああ」

「おいがむしん。折角の酒がまずくなるから、その深い溜息やめろって」

「そーだよ新さん。何でそんな深い溜息吐くかなあ」

斯様に会話を交わしているのは、先に述べた壬生浪士組の面々。日は落ち、代わりに白い光を放つ満月が天に昇って夜を照らすのを「縁屋」の座敷の一室で見上げながら、その3人の青年はぐいと酒を呷るのでございました。

「がむしん」と呼ばれ、溜息を吐いた青年の名は永倉新八。他の揚屋とは趣が異なる「縁屋」の、質素でありながらも質の高い料理や酒を好み、ちよくちよくこの店に顔を出す常連でございます。

普段ならこの縁屋には1人で来るのですが、今日は何故か彼その他あと2人、何故か少しだけからかう様な表情で彼の脇に座っておりました。

一方は永倉と同年くらい歳の精悍な顔つきの青年。脇に置かれている武器は長い槍でございます。背も高く、見目は間違はなく好青年と言った所でございます。

もう一方は永倉達よりも年下でしょうか。あどけなさ残る顔立ちではございますが、永倉達とは長い付き合いなのでしょう、特に気負った様子も無く接しております。

座敷にいるのがその3名のみでございますので、まだ逢状を出してからそれほど時間も経っていないのでございましょう。

「変死体なんざ見たくもない。まして、身内もそれに殺されているのにつて事になりやあ……」

「……ああ、それが……」

「殺されたの、左之さんの隊の奴だったんだっけ？」

「まあな。……良い奴だったのになあ」

今度は永倉と同年代の青年……左之、と呼ばれた彼が、深い溜息を吐き出し、沈痛な面持ちで手元の杯を見下ろすのでございます。

実は葉月の初旬、彼の部下である「佐々木愛次郎」なる青年が、その恋人である「あぐり」と共に変死体で見つかるという痛ましい事件が起こったばかりでございました。

その奇異な傷口から、文月末からの「刺殺事件」の1つである事は明白なのですが、世はそうは思わぬのでしょう。市井では、その亡骸の奇異さの為なのか、「佐々木は暗殺されたのだ」とまことしやかな噂が流れておりました。

「出来ている傷が、刀傷だって言うならまだ理解できるんだ。不逞浪士に斬りかかれたとか、そう言う風に。だが今回は……」

「刀よりも更に細い物。新見さんと山南さん曰く、『釘の様な物』だだよ。あの壮絶に仲の悪い2人の意見が、珍しくも一致してるんだ。間違いは無え。こなくそっ！　どうやって釘の様な物で殺したって言うんだよ」

「って言うか、『様な物』って何。他に何かある？　あの傷は完全に釘でしょ」

「左之が問題にしたいのは、釘で本当に人が殺せるかって事だろ、平助」

「いやまあ、そーなんだけどさあ」

永倉に返された言葉に対し、平助と呼ばれた最年少の青年は困ったように頬をかきながら答えを返すのでございました。

そう。最近起こる「刺殺事件」。これは刀による刺殺ではなく、何やら「釘の様な物」によって四肢と額、そして心の臓を貫かれると言う、想像するだにおぞましい方法で行われていたのでございます。

しかしながら、釘は近寄らねば打ち込む事など出来ませんし、仮に釘を打ち込む距離を取ったとしても、骨や筋に当たってしまい、

最中で止まってしまうのが普通。まして貫くともなれば、余程の長さを持つ釘でなければ難しいでしょう。

到底人間業とも思えぬ所業に、浪士組の面々も頭を悩ませていたのです。

——こんな事ができるのは、やっぱり人間じゃない、よな……——

永倉が心の内でそう呟いた瞬間。座敷の襖がすつと小さな音を立て、彼らの前に小さな影が、ちょこんと姿を現したのでございました。

「お晩どす。永倉はん、お姉さんはもう少ししたら来はりますう」
姿や言葉から、禿の少女である事は、即座に理解できました。ですが、通常禿は座敷に上がる事はございません。恐らくは少し遅れると言言伝ことづてをしに来たのでしようが、それならば襖の向こうから伝えれば済むだけの事。

不思議に思う「左之」と「平助」を余所に、永倉はそれまで険しく歪めていた表情を少しだけ和らげると、彼女に向って来い来いと手招きをするのでございました。

「よおあやめちゃん。いつも忙しいのに、悪いな。……それじゃあ、水菊さんが来るまで、話し相手になってくれよ」

「へえ、ほならお姉さんが来るまでの間だけ、お邪魔しますう。でも、うちは忙しい事なんてあらしまへんえ？ それにしても、珍しいどすなあ、永倉はんが他の方と一緒に来はるなんて」

「……1人で来ようと思ったのに、こいつらが勝手について来たんだ」

少女……あやめの、笑いながら放った言葉に、永倉はどこか不満そうな表情でちらりと2人を見ながら返すのでございました。

一方で2人はと申しますれば、どうやら永倉とあやめが兄妹のように見えたのでございましょう。どこか微笑ましく思いながら、やって来た彼女に向って笑むのでございました。

「地味な感じだけど、料理も酒も美味い。新さん、こんな良い所独り占めはするいよ。あ、俺は藤堂平助って言うんだ。よろしく」

「平助の言う通りだな。……ああ、俺は原田左之助って言うんだ。仲間内からは左之、左之助と呼ばれてる」

「ここは俺の憩いの場なんだよお前らがいたら憩いにならないだろうが」

「永倉はん、そんな風に言わんといっておくれやす。島原はどんな方でも歓迎しますえ。……藤堂はんは原田はんどすね。ご挨拶が遅れました。うちは水菊姉さんに付いている禿で、あやめ、言いますう。どうぞ、よろしゅう」

ちょこんと頭を下げ、「平助」こと藤堂と、「左之」こと原田に向いてあやめは改めて挨拶を致します。

その様子に、2人もほんわかと温かい気分になりながら、彼女に視線を送るのでございました。

「……それにしても、あやめちゃん1人で来たのか？ 気をつけないと駄目だぜ？」

「そうそう。いくら禿の嬢ちゃんが勝手知ったる島原とは言え、最近は色々と物騒だからな」

「物騒言うたら、『釘磔』^{くぎはりつけ}どすなあ。でも、うちが狙われるとは思えまへんえ？」

「釘磔」と言うのは先に述べました「刺殺事件」の事を指しております。それは、亡骸がすべて地面に磔にされているように見える事からきた島原特有の呼び名でございました。

狙われているのは主に16、7頃の娘と、それと共にいた男でございますが、相手は釘で人を殺めるような危険な者。10前後のあやめが、「絶対に無事」と言う保証は無いのでございます。

その事を伝えたいのか、藤堂はじつとあやめの顔を覗き込むと、少しだけ険しい表情で彼女に言葉を紡ぐのでございました。

「それでも、危ないよ。君が被害者になる事だって、絶対に無いとは言えないんだから」

「……へえ。胆に銘じておきます。心配してくれて、^{ありがたう}おおきに」
につこり笑ってあやめが答えると、あたかもそれを待っていたか

のように、再度襖がすつと微かな音を立てて開き、待ち人……永倉が呼んだ鬘肩の芸妓である水菊がその姿を現したのでございます。彼女の後ろでは、物陰に隠れるようにして佇む銀彌の姿も確認できます。

「水菊どす。よろしゅう、お頼申しますう」

「よ、水菊さん。待ってたぜ」

「お晩どす、永倉はん。いつもご鬘肩にして下さって嬉しいわあ。

今日はお仲間はんとご一緒なんどすねえ」

「……うわあ、びっじーん……」

「……………がむしんには、吊りあわない美女だな。勿論、がむしんが駄目な方で」

ふわりと笑った水菊に対し、心からそう思ったのでございましょう。どこか呆けたような表情を浮かべながらも、藤堂と原田はそれぞれに言の葉を紡ぐのでございました。

……その後ろで、あやめが妙に得意げな表情をしている事など、微塵も気付かずに。

「ほな、お姉さん。何かあったら呼んでおくれやす」

「ありがとぅ、あやめちゃん。あやめちゃんも、何かあったらすぐに呼ぶんよ」

「へえ」

ぺこりと再び頭を下げ、あやめは水菊と入れ替わるように襖の向こうへとその姿を消したのでございます。

それを見送るや、永倉はそれまで浮かべていた笑みを消すと、口の中を湿らせるように酒を呷り……そして三味を奏ではじめた水菊に向って、問いを向けたのでございました。

「水菊さん、知ってたら教えて欲しいんだけどさ」

「へえ。何どすえ？」

「最近の『釘磔』……誰の仕業か、分つたりしないかな？」

真剣な表情で問う永倉に何を思ったのでございましょう。原田は呆れたような表情になり、そして藤堂は軽く首を傾げて、それぞれ

に永倉に視線を向けたのでございます。

「おいおいがむしん。いくら島原が情報の集る場所って言っても、そんな物まで分ったら苦労は……」

「それらしい話で良ければ」

「って分るんだ!？」

「誰、言うのははつきりしてまへん。でも……『お姉ちゃん』は鬼や、言うてますう」

たおやかな笑みを浮かべ、そして手元では三味を優美に鳴らしながら、水菊はさも当然の如く答えを返したのでございます。

ですが、その答えは現実味に欠けた比喻のようなもの。本当に下手人を知っているのかもしれないと思つた原田と藤堂は、あからさまに落胆した様子を見せるのでございました。

唯一、永倉だけはその言葉の意味を考えているのでございましょう。軽く眉を顰め、心底憂鬱そうに溜息を1つ吐き出したのでございました。

「……そうか。鬼、か」

「まあ、確かにあんな事、鬼の所業って言われた方が納得だぜ。人のやる事じゃねえ」

杯に視線を落とし、静かに呟く永倉とは対照的に、原田の方は心底憎々しげに吐き出し、勢い良く杯を呷るのでございます。

更にそんな2人を藤堂は苦笑気味に見つめつつも、水菊の奏でる三味の音に耳を傾け、料理を口に運ぶのでございました。

気まずい沈黙の中、黙々と奏でられる水菊の三味。その三味すらも、曲が終わったのかびいんと弦が震える音も徐々に消えていく中、水菊が三味から顔を上げると、外に浮く真円の月を見上げながら、謳うように言の葉を紡ぎだしたのでございます。

「今宵は美しき天満月。月の明るさに相反して、闇が最も濃くなる日いどす。皆様、闇が濃くなる丑の刻こくには、気をつけておくれやす」と……

そして、夜も更け丑の刻にさしかかろうかと言う頃合。

昼の暑さはすっかり鳴りを潜め、肌寒いくらいの空気が、どんよりとわだかまっておりました。

「……相変わらず、この時間の空気は肌に纏わりつくようで気持ち悪いな……」

月明かりの元、そう呟くのは浪士組隊士の証である浅葱色の隊服を着た永倉。そして本来なら部下がいるはずの彼の脇には、部下の代わりとでも言うように、何故かあやめ1人だけが当然の如く歩いておりました。

彼らの手元には松明や提灯といった灯りは一切なく、月と星の光のみを頼りに歩いている様子でございます。

「……あやめちゃん、俺今日死番だったんだけどな……」

「ならば来なければ良かったのでは無いか、永倉君。付き添いは別に銀でも良かったのだが？」

横で愚痴を漏らす永倉に、あやめは廓言葉ではない……今朝方銀彌に対した時と同じ様な、不遜な物言いを返すのでございました。

おまけにその顔に浮かぶのは、見目の年齢に見合わぬ不敵な笑み。着ている物はいつもの禿の時に纏う様な音の鳴る袖ではなく、闇をそのまま布に仕立てたかのような漆黒の振袖でございました。

「それでも来たと言う事は、菊の『合言葉』に気付き、なおかつ『闇の者』と対峙しようと思ったからだろう？」

「一応、京の守護を務める浪士組の幹部だからな。京を騒がせた者の末路を、見届ける義務がある」

かちりと刀の鏗を鳴らし、永倉は真っ直ぐに前を向いて言葉を返したのでございます。

そんな彼の横顔を見やり、軽くあやめは笑うと……

「さて。それではこの辺で『誘う』とするか。……先程からつけてきている事だしな」

そう言うと同時に、彼女はトン、と軽い足音を立てて宙を舞った

のでございます。

その様はまるで月夜を踊る蝙蝠の様。あやめの小さな体は、宙で月の円と重なると、くるりとその場で一回転し……地に降り立った時、その姿は童女としてのものではなく、17、8の妙齡の女性の物へと変化していたのでございます。

黒く艶やかな髪は京の風に舞ってふわりと靡き、大きくパツチリとした目は、以前の面影を残しながらも色艶を帯びた血色へ変化し、口元からは犬歯と呼ぶには長すぎる牙が覗いております。そして身に纏う雰囲気は妖しさに満ち溢れておりました。

その「変身」を、永倉はかつて見た事があるのでございましょう。驚きよりも感心したような表情を浮かべ、ほうと1つ溜息を漏らすのでございました。

「……いやあ……やっぱりその変身は見事だなあ。……相変わらず体型は寂しいけど」

「……………永倉君、君、銀の悪い影響を受けていないかな？ 私とて、好き好んで**まないた**俎板な訳では無いのだが？」

「ちよっ！ あやめちゃん！ 首！ 首絞まつてる！！」

につこりと。いつそ綺麗にも見える笑顔で言いながらも、あやめは永倉の襟首を掴み、ぎゅうと締め上げるのでございます。

恐らく、本人も自身の胸囲が乏しい事を気にしているのでございましょう。そこは所謂乙女心と言う物でございます。

しかし、唐突に。彼女は永倉から手を離すと、自身の後ろに広がる闇に目を向け……

「お出ましのようだぞ、永倉君」

その言葉と同時に、永倉の背にぞくりと栗立つような感覚が襲い掛かります。

それは、恐怖と呼ぶべきものでございましょう。無意識の内に恐怖の出所に視線を走らせ、己の腰に差す刀に手を当てるのです。

そんな彼の殺気に反応したのでございましょうか。闇から滲み出るようにして、1人の女性がその姿を現したのでございます。

ただ、女性の醸し出す雰囲気は尋常な物ではございません。艶を失った黒く長い髪は乱れ、髪の間から覗く目は憎悪で滾り、頭に乗せている五徳はあたかも角。一本歯の下駄を履いているはずなのに足音はせず、口に咥えている櫛は歯が折れ、牙の様にも見えるのでございます。

そして櫛を咥えているにもかかわらず、彼女の声ははつきりと永倉とあやめの耳に届くのでございました。

「酷い、酷い、酷い、酷い、酷い、酷い」

虚ろな瞳を真っ直ぐに永倉に固定し、彼女は手に持っている「それ」を構え、更に言葉を紡ぐのです。

「どうして私ではいけないの？ どうして彼女を選んだの？ あれ程将来を約束したのに」

そうは言われましても、永倉は目の前の女性を存じません。

人違いだと言いたいところではございますが、恐らく相手にはその声は届かないでしょう。まして、彼女の持つ「それ」は此度の「釘磔」の道具その物。……鉄鎚かなづちと五寸釘を持っているのです。

「憎い、憎い、憎い。彼が憎い。でも、彼を私から奪ったあの女は、もつと憎い！」

低く、憎悪の籠った声で。女性はいわつと目を見開くと、持っていた五寸釘を放り上げ、そして次の瞬間にはもう一方の手に持っていた鎚で釘の頭を叩き、2人に向けて飛ばしたのでございます。

その様はまるで弾丸。女の力とは思えぬ威力で打ち出された釘を、永倉は即座に抜いた刀で弾き落とすと、緊張した面持ちで横に立つあやめに声をかけるのでございます。

「……あやめちゃん、アレが……今回の下手人、『鬼』って奴か？」

「その通りだ。いつの世も、げに恐ろしきは女の情念。……君は『丑の刻参り』と言うのは知っているか？」

「『丑の刻参り』の事か？ 藁人形に五寸釘打ち付けるって、アレの事なら聞きかじり程度には」

「読みは少し違うが、それだ。通常は7日間かけて完成させる呪詛すそ

だが、大抵は途中で誰かに見つかってしまい、失敗に終わる」

次々に打ち込まれてくる釘をかわしながら、2人は斯様な会話を交わすのでございました。

言われてみれば、確かに釘を打ち込む女性の姿は、俗に聞く「丑の刻参り」の際の姿。通常は五徳の上に蠟燭を立て、腰に護り刀、胸に鏡を提げるのが慣わしとも聞いておりますが、今の彼女にはその3点は見当たりません。

丑の刻に神社の御神木に向って、憎い相手に見立てた藁人形に、毎夜五寸釘を打ち込むと言う古くからの有名な呪法が、先に述べた「丑の刻参り」でございます。ただし、儀式の様を他者に見られれば、その呪いは自身に返って来ると言われ、誰にも見られずに7晩かけて呪詛を完成させる事は、酷く難しいとも言われておりました。

「しかし、稀に執念で呪詛を完遂させる女もいてな。……………あれは完遂させた女の末路だよ」

「成功させたんなら、何であんな……………」

「人を呪わば穴2つ。誰かを呪い、そして完成したとしても、7晩の間込めに込めた怨念は、1人の命では満足しない」

「呪った本人にも、その怨念が向くって事かい？」

「そうだ。その怨念は、対象が消えた事を認識出来なくする。呪いたい『たった1人』が、未だ自身の目の前に存在し、邪魔をしているような錯覚に陥る。それが……………ヒトが鬼女へと『墮す』原因の殆どだ」

「妖怪に…………『闇の者』になる為に、呪いをかけた訳じゃないだろうに」

執拗に釘を打ち込む女を、どこか哀れに思いながら、永倉は飛んでくる釘を弾き、そう小さく呟くのでございました。

世には、闇に魅入られ、人とは異なる存在…………「妖怪」、「物の怪」、あるいは「闇の者」と呼ばれる者達が、人知れず存在おります。

生まれついで「闇の者」を「業を背負う者」を意味する「架人^{かしん}」と呼び、ヒトが何らかの原因で「闇の者」へと変じてしまった者を「墮^だした者」を意味する「墮人^{だじん}」と呼び分けるのでございます。

そして目の前に立つ「鬼」は後者である「墮人^{だじん}」であり、永倉の横でひよいひよいと釘を避けているあやめは「吸血鬼^{バンパイア}」と呼ばれる種の「架人」でございます。

かつてひよんな事から、永倉は彼女の正体を知り、そして手伝うようになつておりました。

……「宵闇太夫」と呼ばれる、島原の妖怪退治人である彼女の。
「死んで！ 死んでよお！ 私の邪魔をした罪を償つてよおおおつ！」

髪を振り乱し、ひたすらに釘を打つ様はまさに丑の刻参りその物恐らく鬼へと墮した彼女には、未だ呪詛は続いていると思つてるのでございましょう。

ギラギラと憎悪で滾らせた目をあやめと永倉に向けながら、咆哮にも似た声で叫ぶのです。

そんな彼女に何を思ふのか。あやめは軽く息を1つ吐き出すと、釘をかわしながらゆっくりと「鬼女」との距離を縮め、言葉を紡ぐのでございます。

「呪い、そしてそれを完遂させるだけの気概を持ちながら、どうして別の方へその情念を向けられなかったのか」

歩く度、彼女の前に見知らぬ赤い花弁が緋の絨毯となつて道を作り、どこからともなくシャンシャンと清んだ鈴の音が響きます。

同時に、あやめの纏う着物からはぶわりと「黒」が広がり、周囲の空間を月の光さえ届かぬ深淵の闇で遮断したのでございます。

その、自身すらも見失いそうな闇故に。あやめの浮かべる表情は、永倉にはわかりません。ですが続く彼女の声はどこか哀しげに思えるのでございました。

「……いや。恋焦がれた者は、他の事に目を向ける事が適わんと言ふ事か」

その言葉と同時に、空間を覆っていた闇が、あやめの手の内に収束し……そして、漆黒の刀へと変じたのでございます。

闇を断つ為の更なる闇。それこそが、彼女が持つ絶対の力。

「呪ってやる。呪ってやる！ 私の邪魔をする者、私を捨てる者、皆みいんな呪ってやるううう！！」

その力に、闇に堕した「鬼女」は恐怖を抱いたのでしょうか。彼女はそう叫びながら、それまで永倉にも打ち込んでいた五寸釘をあやめに集中させ始めます。

しかしながら、あやめはそれをひらりひらりとかわし続け……ついには、「鬼女」の前に降り立ち、五寸釘を持つ腕を切り落としたのでございます。

落とされた腕は地に落ちる前に闇と同化し、あやめの纏う着物へと吸い込まれるのです。一方で持っていた五寸釘はチリンと冷たい音を鳴らして地面に落ちるのです。

「い……いやあああああつ！ 呪えない！ 腕がなきゃ呪えないいいいいいっ！！」

「人から堕した闇の者よ。貴様の止まった時間は、死を以って再び動かすと良い」

感情の読めぬ声で言うと同時に、彼女は大きくその刀を振り下ろし……「鬼女」の体を縦2つに断ち割ったのでございます。

刹那。「鬼女」は驚いたような……ですがどこか安心したような表情を浮かべると、ゆっくりと瞼を閉じ……そして大地に伏す直前、やはりその身は闇と化し、溶ける様に消え失せたのでございました。それを見届け、永倉はふうと深い安堵の溜息を吐き出すと、ぽんとあやめの肩を叩き……

「お疲れさん。……これでもう誰も『鬼女』のせいで傷付く事はない」

「ああ、そうだな。民も……そして彼女自身も」

「彼女自身？」

「ああ。……誰かを呪い続ける人生など、苦しいだけだから」

そう言っ

あやめは哀しげに笑うと、その身をいつもの禿姿に戻し、くるりと踵を返して京の闇へと消えるのでございました。

——「闇の者」を狩る「闇の者」。時間の止まった存在、か……——

……文久3年葉月の中頃。満月の白い光の下、消え行く小さな闇の少女の背中を見送りながら、永倉新八は思うのでございます。

彼女の止まった時間は、一体誰が、どのようにして動かすのであろうかと……

その2：文久3年、文月・壺

文久3年、残暑の厳しい長月の頭の昼下がり。

買い物帰りのあやめは、図らずも永倉のいる壬生浪士組……いえ、「新撰組」の屯所の前を通りがかったのでございます。

「八月十八日の御政変」と呼ばれる、会津、薩摩の二藩を中心とした公武合体派と呼ばれる面々が、京や朝廷に蔓延っていた、長州藩をはじめとする尊皇攘夷派の面々を追放すると言う大きな事件^{クーデター}が、「鬼女」を倒した数日後に起こったのでございます。

それに際し、「会津藩お預かり」と言う立場であった浪士組も、会津藩側として参加。その際の功績を認められ、「新撰組」なる名を会津公より賜ったのだと聞いております。

「ようやく永倉君達も認められたと言う事か。……だが、400年ぶりの激動の時代。幕府が、そして新撰組がそれを乗り越えられるかまでは……流石に読めん」

微かに眉を顰めつつ、彼女はそう小さな呟きを落とすと、己の置屋に向って再度歩を進めるのでございました。

彼女の言葉で察せられるとは存じますが、あやめは見目こそ10やそこらに見えますが、その実400年を越える年月^{としつき}を渡っております。

生まれながらの「闇の者」達は、ある程度までは人と同じ様に歳を重ねるのでございますが、その成長……「時間」が止まるのでございますが、あやめの「時間」が止まったのは今の見目の通り10の頃でございました。

それ故、彼女はこれ以上成長する事はなく、その事が彼女の唯一の悩み。

——止まるなら、もう少しこう……菊のような大人の女になってから止まれば良かった物を——

等と、いつも己の侘しい体を見下ろしながら思っているのでございます。

子供であるが故に得をする事も多々ございますが、そこはやはり女性と言ふべきでしょうか、女らしい体つきに憧れを抱くのは、致し方ない事と申せましょう。

何よりも不便なのは、成長しない事を怪しまれぬよう、定期的に彼女と関わった者の記憶を改竄しなければならない事でございます。生まれながらの「吸血鬼」である彼女には、ヒトにあらざる者特有の特異な力が、幾つか備わっております。そのうちの1つは満月の夜にのみ行える「変身」。そして別の1つが「他人の記憶操作」でございます。

「いつまで経つても子供のまま」、「少量とは言え人の血を啜つて生きる者」……それらの「事実」は、何も知らぬ者にしてみれば不気味極まりない出来事。そして人間は己の理解を超える者に対して、とことん無慈悲な仕打ちが出来る生物でございます。

いくら人間を護ろうとも、気味悪がられる事は彼女とて本意ではございません。故に、彼女は一部の例外を除いて、定期的に島原に住まう者達を中心に彼らの記憶を改竄。常に「あやめは数年前に島原に売られた禿」と思い込ませるようにしているのでございます。

一部の例外と言うのは、彼女の事情を知り、その上で彼女を受け入れてくれる者……姉芸妓の水菊や、置屋の「母」である百花ひゃっか、そして新撰組の永倉などがそれに当たります。

他にも稀に、「記憶操作を受け付けない者」もあり、あやめも過去に幾人か、そう言う体質の人間と出会っております。置屋の男衆である銀彌も、この「記憶操作を受け付けない者」でございます。

——何にせよ、子供のままと言うのも厄介な事だ——

ふうと深い溜息を吐き出しながらも、彼女はころころと下駄を鳴らしながら新撰組の屯所が1つである八木邸の前を通り過ぎ、更にその隣に建つもう1つの屯所である前川邸の前に差し掛かったその時。

「おい、その童、こっちに来い」

前川邸の中より、低く威厳のある声が響いてきたのでございます。

その声の方を向けば、そこには齡30後半頃、大柄で体格の良い男性が不敵にも見える笑みを浮かべ、手に持つ鉄扇で誰かを招いております。前川邸にいると言う事は、家人なのかあるいは新撰組の関係者か。腰に差している刀や、彼の持つ威厳から鑑みるに、恐らくは後者でございましょう。

彼の足元には、幾人かの子供がわらわらと群がっており、彼の人物の体を、まるで相撲でも取るかのようにぐいぐいと押しております。それでもピクリとも動かぬのは、流石と言うべきでございましょうか。

とは言え、あやめには彼の人物に呼ばれる理由がございません。自分の他に誰か子供でもいるのかと思い、きよろきよろと周囲を見回しますが、彼女の周囲には子供どころか猫の子一匹おりません。

「……うちの事ですか？」

きよんとした表情を浮かべ、思わず問うたあやめに、彼の人物は鷹揚に頷きを返すと、持っていた鉄扇をバチンと鳴らして広げ、楽しげな表情を浮かべるのでした。

「そうだ。その格好から察するに、島原の禿か。使いの帰りか？」

「へえ、そうどす」

「そうかそうか。よし、ちよつと遊んでいけ」

——何がどう「よし」なのだ？——

「早よ帰らんと、お母さんに叱られてしまいますう」

心の中で冷静なツツコミを入れながらも、面では困ったような形を作つてやんわりと断りを入れます。

しかしながら、相手はその困惑の表情など意に介さぬかの如く、はっはっはとその大きな体を揺すって高らかに笑い飛ばすのでした。「なあに、叱られるようなら、俺と一緒に謝つてやる。子供は遊ぶのが仕事だ」

「芹沢あ、今度はかくれんぼしよーぜ！」

「おお、構わんど。では、俺が鬼をやるう。……ほれ童、お前も早く来て隠れろ」

言うが早い、芹沢と呼ばれたその男はあやめの体を軽々と抱き上げると、強引に前川邸の庭へと引きずり込んだのでございます。

子供とは言え、曲がりなりにも花街である島原の禿。着ている物には仕掛けと呼ばれる飾りも多く、抱え上げるには少々重く出来ております。それを軽く持ち上げたと言うのは、流石は新撰組の一員と言えますでしょう。

しかも、芹沢にじゃれ付いていた子供達は既に隠れ始め、芹沢も庭の真ん中であやめを下ろすと、ぽんと軽くあやめの背を叩いて隠れるように促すのでございました。

「隠れる範囲はこの前川邸の庭の中のみだ。荷物は預かってやるから、早く隠れろ」

言いながら、芹沢は半ばひったくるようにしてあやめの手の中にあった荷物を奪い、おまけにそれを抱えたまま目を瞑り、数を数えはじめるではございませんか。

——これはもう、参加せねばならんようだな——

心の中でのみそつと嘆息を漏らしながら、あやめは諦めたようにきよろきよろと周囲を見回し、己が隠れる場所を探したのでございました。

それから半刻程経ち。やや陽の傾き始めた道を、芹沢とあやめは並んで歩いておりました。

あやめの荷物は芹沢が片手で持ち、空いている手であやめの手をつないでいるその様子は、まるで親子のよう。顔に浮かぶ表情は、とても楽しげで……しかしほんの少しだけ、悔しげな色も混じっているようにも見受けられます。

それもそのはず。芹沢は最後まで、隠れたあやめを見つけ出す事が出来ず、結局は彼女に降参したのですから。

「この俺が見つけれんとは。楽しかったが、酷く悔しいぞ。他の童達も、お前を見つける事は適わなかった。……結局、どこに隠れ

ておった？ 本当に庭におったのか？」

「へえ。うち、松の木いの上に隠れておりましたんえ」

「なんと。木に登ったと言うのか！？ はっはっは、やんちゃな禿もいたものだ」

「お母さんには内緒にしておいてくれやす」

しいと人指し指を自身の口元に当てて言うあやめに、芹沢も目を細めて鷹揚に頷きを返します。

島原に住む女は、芸で人を楽しませる事を生業としております。故に、その身につけるべきは優美さとたおやかさ。木に登るなどと言ってお転婆な真似は、そうそう致しません。

まして彼女達の着物は木登りには向いていない、華美で動き難いもの。その着物を汚しもせずに隠れ果せたと言う事は、随分と登り慣れているのであるう事は即座に察せられます。

「知ってはります？ 人は、自分の目線より上つて、あんまり探さんのどすえ。せやからうち、芹沢はんよりも高い場所を探して、松の木いの枝登ったんどす」

「成程。参考になる。今度からは上も気にするでしょう。……お前はそうやって芸事から逃げているのだな？」

「……いけずな事、言わんとして下さい。うちはちゃぁんとお稽古してますえ」

「はっはっは。冗談だ。お前が稽古をきちんとこなしているのは、握った手にある胼胝たじからも分る」

言うと同時に、あやめの手を握る力が、ほんの少しだけ強くなるのを感じます。しかしそれは、決して悪い印象は与えず……むしろ本当に、子を護る親のように、力強く、そして温かみのある力の込め方でした。

一方であやめも、芹沢の手にある胼胝に気付きます。同時に、その手に残る無数の傷にも。

刀を握り、戦ってきた者でなければ斯様な胼胝は出来ません。長い年月の中、そう言った傷の持ち主を幾度となく見てきた彼女にと

つて、芹沢の手の感触は、どこか懐かしさを感じさせるのでございました。

「島原の女とは言え、お前もまだ子供だ。稽古も必要だが、偶には今日のように思いきり遊べば良い」

「『子供は遊ぶのが仕事』やからどすか？」

「その通りだ。そして大人の仕事は、子供の遊びを護る事だ。だが、それが出来ん大人が多い。……この俺も含めてな」

最後の一言に、暗い印象を抱いたのでございましょうか。それまで前を見ていたあやめが、訝しげに芹沢の顔を見上げるのです。

ですが、俯いている彼の顔は、夕日のせいで影になって読み取る事は出来ません。ただ、微かに悔しげに顰められた眉が、辛うじて見える程度でございました。

それ以上、何かを口に出す事は憚られたのか。2人は無言のまま、橙に染まる道を歩き……そして、彼女の住まう置屋の前まで到着したのでございます。

そこに立っていたのは、間もなく50に手が届くか否かと言った年齢の女性。地味ながらも品のある着物を着こなし、優美な立ち姿から、かつてはさぞ名の通った芸妓であつたであろう事を思わせま

す。

艶のある表情は不安げに歪められ、そしてあやめの姿を見た瞬間、安堵の色が広がり……直後、キツと眦を吊り上げると、その女性はあやめの前で膝を折って視線を合わせ、鋭い口調で言の葉を紡いだのでございました。

「ああ、遅かつたやないの。心配したんえ、あやめ！」

「ごめんなさい、お母さん」

そう。この女性こそ、置屋の「お母さん」。芸妓としての名は百花と言い、年季が明け、置屋の母となった今でもその名を使っております。

本当の名は、己が花柳界から完全に身を引く時まで使わない。その意思を貫く為でございました。

己が抱える芸妓や舞妓、そして禿達を立派に独り立ちさせる事を目的としている為、「芸事に、そして自身に厳しく、他人には優しい女性」……それが百花の人柄を示すのに最も適した言葉でございます。

その事を芹沢は知っているのでしょいか。百花に向つてはつの悪そうな表情を浮かべ、言葉を紡ぐのでした。

「すまんな女将。俺が無理を言つて引き止めていたのだ。その童が悪い訳では無い。だから、叱つてやるな」

「……ふう。心配はしてましたけど、怒つてはおりまへんえ」

呆れの混じつた溜息を吐き出しながら、今度は眉を八の字に下げ、て百花は芹沢に返します。

その表情に安堵したのか、芹沢はふ、と口の端を吊り上げると、もつていた荷をあやめに渡してから踵を返し……

「ではな。……童、時間があればまた来い。勝ち逃げは許さんぞ」

ひらひらと手を振りながら、芹沢はそう言つて夕陽に向つて歩んでいったのでございます。

普段なら燃えている様に見えるはずの道は、しかし今日に限つていやに紅く……まるで芹沢が血の道を歩み、そして芹沢自身も血に染まつているかの様に見せていたのでございました。

しかしその後姿も、やがては消え去り……それを確認するや、百花はあやめの手から荷物を受け取つて己の私室に通すと、恭しく頭を下げ、そして口を開いたのです。

「……お戻りやす。まさかあの芹沢はんに捕まつてはるとは、思いまへんどした。あやめ姉さん、よお無傷で帰つて来れましたなあ」

「彼に何かあるのか？」

「あのお人は、浪士組……いえ、新撰組の筆頭局長、芹沢鴨その人ですえ」

百花の告げたその名に、あやめの眉がピクリと跳ね上がります。直後に浮かぶのは、あまり好意的とはいひ難い表情。

苦々しいような、困惑したような……そんな顔でございます。

「……『芹沢』と言うのは、どこかで聞いた事のある名だと思つたら。水無月に『角屋^{すみや}』を7日間の営業停止処分^{すみ}に追い込んだとか言う、『恐怖の筆頭局長』か」

芹沢鴨。

あやめの知る限り、その人物の悪評は留まる所を知りません。

商家に対する恐喝紛いの資金集め、大坂で起こした力士達と乱闘を起こして相手側に死傷者を出させ、先にあやめが言った「角屋」なる揚屋では、宴会の最中に大暴れした拳句7日間の営業停止処分を言い渡すと言つた暴挙にまで出る始末。

間違いなく、新撰組の悪評の一端は、彼が担つていると言つても過言ではございませんでした。

「しかし、先程の彼を見る限り、そう言う事をしそうな男には思えないがな」

「お酒が入ると危ないで、もつぱらの噂です」

酒乱と言う事でございましょう。確かに彼のあの大きな体軀では、酔つて暴れた際の被害は甚大なものであろうと、容易に予想できません。

実際に「角屋」は営業停止を命ぜられております事から、噂とは言えそれ程大きな誇張は含まれてはいないのでございましょう。

そして、自身の酒乱癖を理解しているからこそ、彼は言つたのでしよう。「自分も含めて、子供の遊びを護る事が出来ない大人が多い」と。

「……ただ……これは色んな揚屋の楼主はんから聞いた話ですけど、一概に芹沢はんだけが悪い、言う訳と違うみたいですよ」

「勿論、芹沢はんの酒乱はとんでもない物ですけど……実は芹沢はんの腰巾着に、新見、言うお人がいてはって、このお人、見目は優男風やのに、とても乱暴なお人やて」

「……成程、芹沢君に、その新見某^{なにがし}とやらが罪を着せている事も多々ある、と言う訳だな」

呆れたような溜息混じりに吐き出したあやめに、百花はこくりと頷きを返し……そして直後、それまで浮かべていた「あやめの協力者」から、「置屋のお母さん」の顔に変え、彼女の顔を覗き込んで言うのでございました。

「あやめ、『お説教』はここまでです。早よ水菊のところへ戻って、支度してきなさい」

「へえ。ほんまにごめんなさい、お母さん」

ぺこりと頭を下げ、あやめもまた「帰ってくるのが遅くなって叱られた禿」を演じ……その部屋を後にするのでございました。

*

その日の夜。空に上る二日月を見上げながら、芹沢鴨は前川邸の縁側で独り酒を嗜んでおりました。

思い出すのは昼に出逢った、あやめと呼ばれた禿の少女。

幼い頃から島原と言う苦界に身を置いているのか、年齢に相応しくない、妙に老成した雰囲気纏う彼女に、芹沢は不思議な感情を抱いておりました。

負けず嫌いである芹沢が、かくれんぼとは言え敗北を喫しながら、あまり腹が立たないのは、彼女に対して友情めいた感情を抱いているからでございましょうか。

—— 齢10前後の子供に対しての友情、か——

己の考えに、思わず苦笑を浮かべながらも、芹沢はぐいと酒を呷るのでございます。

—— だが、何故だろうな。…… 悪くは無い——

ほろ酔い気分とはこう言う事を言うのでございましょうか。自然と口の端には、先までとは全く異なる種の笑みが浮かび、それにつられるように微かな笑い声も漏れるのでございました。

恐らくは、不覚にも「楽しい」と……そう思ったからかもしれない。子供達と遊んだ時間も、そしてそれを思い出して酒を呷る「

今」も。

——こんなに心が和^ないだのは、いつ以来だろうな——

市井の噂、そして普段の彼からは想像もつかない程穏やかな表情を浮かべ、再度空の月を見上げた刹那。

唐突に、芹沢の背後から声が上がったのでございました。

「随分とご機嫌がよろしいですね、芹沢先生」

「……新見か」

振り返り、声の主を確認すれば。そこには芹沢にとって見慣れた顔の青年が、奇妙な笑みを顔に貼り付けて立っておりまして。

28と聞いておりますが、見目は齡23、4。切れ長の目に、墨を流したような黒髪。一見すると優男の好青年に見えますが、着ている物には咲いたばかりと思しき赤い血の花。誰かを斬った帰りなのでございましょうか、その体からは吐き気がする程に濃厚な血の臭いが漂っております。薄闇ゆえに見辛くはありますが、おそらく顔も返り血そのままになっている事でございましょう。

新見錦と呼ばれている彼は、この新撰組の副長。元は芹沢や、試衛館派の近藤勇と同じ局長だったのですが、水無月にあつた「浪士組再編」の際、彼の粗暴さ故に局長から副長へと降格させられたのでございます。しかしその後も特に気にした様子もなく、勝手気ままに振舞っては、京の街へ強^{ゆす}請り集^{たか}りを繰り返していると、芹沢は聞いております。

そんな彼の登場に気分を害されたのでございましょうか。芹沢は隠す事なく顔を顰めると、低い声で言葉を吐き出すのでございました。

「……また誰かを斬ったのか。新撰組は捕縛第一と言ったはずだが？」

「不逞浪士の抵抗が激しかったので、捕縛は無理と判断して殺しました。緊急措置と言う奴ですよ」

「君は随分と、『緊急措置』の頻度が高いようだな。……毎日では『緊急』とは言えまい」

「恐怖を植えつけるのは大切ですよ？ 叛乱分子達も萎縮してくれますし。まあ、『御政変』以降、尊攘派は自棄になっているのか、こちらが新撰組をわかれば、無駄に斬りかかって来ますがね。正当防衛ですよ」

クックと喉の奥で笑いながら、新見は自身の頬に付いていた返り血を拭い、それをぺろりと舐め上げるのです。

その様子に、芹沢の肌がぞくりと粟立ちます。それは嫌悪もありませんが……同時に恐怖も感じておりました。……新見錦なる男の存在を、本能的に危険だと理解していたからかもしれない。

そんな芹沢の様子に気付いていないのか、彼はさも当然のように芹沢の横に腰を下ろすと、その血に塗れた顔を彼に寄せ、囁くように言葉を紡ぐのでございました。

「甘い顔をしていらっしやる。いつもの威厳が台無しだ。反吐が出そうな程の甘い顔をするのは、近藤局長だけで充分」

月と同じくらい細められた目は芹沢の顔をじつと見つめ、闇と同じ色をした口からはチラチラと赤い舌が蛇のように蠢き、そして近付いてきたが故に彼の体からは血の臭いが更に強く鼻腔を荒らすのです。

生理的嫌悪からか、無条件で苛立たしさを覚える新見の存在に、芹沢は反射的に持っていた鉄扇の先で、彼の額をぐいと押します。ですが、新見の顔はびくともせず、その位置に固定されたまま。

鉄扇の存在など有っても無くても変わらないと言いたげに、新見は更に言葉を続けるのでございます。

「それに、隊士の1人から聞きましたよ。今日は子供達とかくれんぼをして、1人最後まで見つけれなかったそうですねえ。大丈夫なんですか？ それって、『子供を護る』を信条にしていらっしやる芹沢先生としては、問題では」

「……何が言いたい？」

「見つからなかった子供が、実は井戸に落ちていたら？ 不埒者にかどわかされていたら？ 復讐に来た不逞浪士に斬り殺されていた

ら？ …………… 監督不行届き、ですよね？」

その言葉を聞いた瞬間、芹沢はその大きな体をピクリと跳ねさせます。

確かに、新見の挙げた可能性も、全く無いとは言い切れなかったはずでございます。

新撰組の屯所だから安全だと、そう思い込んでいた事も確かですが、新撰組の屯所であるが故の危険も、また存在している。……その事を失念していたのは、事実でございました。

そんな芹沢の様子に満足したのか、新見は喉の奥で再度クツクと笑うと、すつと立ち上がった言うのでした。

「子供を護る？ …… どうせ先生は、何をしても上手く行かない星の下に生まれておいでなのですから、無駄な足掻きはお止しになった方が身の為ですよ」

「………… 新見………… 貴様、この俺を愚弄するか！？」

「おや、怒らせてしまいましたか。では、私は退散いたしましたよう」
飛んでくる芹沢の怒号など気に留めた様子も無く、新見はひよいと肩を竦めると、そのままスタスタと自室へと戻っていくのでございました。

後に残されたのは、苛立たしげに酒を呷る芹沢と、彼の醸し出すピリリとした空気。そして、新見の残した鮮血の残り香。

—— 何故俺は、いつも上手くやれんのだ…………！——

呑み始めた頃に感じていた温かな気持ちはすっかり冷え。

芹沢鴨の心に残るは、苛立ちのみでございました。

………… そんな彼を。

去ったはずの新見錦が、物影からこっそりと覗いておりました。

「………… 芹沢鴨。君は怒り狂って破壊の限りを尽すと良い。そして、堕ちてくれ。私の目的の為に」

呟く彼の顔に浮かんでいるのは、血に塗れた姿に見合わぬ穏やかな微笑。ですが言葉の中身は、決して穏やかとは言えぬ物。

「フフ。ああ、君が堕ちた後が楽しみだよ。………… 実に、ね」

彼のその弦きを聞いていた者はなく。唯一、空に浮かぶ道化の目のように細い月だけが、その狂った言葉を静かに聞いていたのでありました。

その3：文久3年、文月・式

島原が一画、揚屋の「縁屋」。

中秋の名月まであと少しと言うその日、その座敷の一室では、今宵は一風変わった客が、一風変わった騒ぎ方をしておりました。

座敷にあります「客」は、常連の永倉新八と、彼の同僚らしき2人の青年。

永倉がここにいるのは、既に日常茶飯事と化している事ですが、変わっているのは彼に付いて来た者でございました。

一方は眉間に皺を幾つも刻んだ、永倉より2、3年上と思しき青年。島原に来ているにも関わらず、あまり酒を召さず、また芸妓である水菊の舞にも興味無さそうな表情を浮かべ、窓辺で煙管をふかしております。

そしてもう一方は先日永倉と共に来た藤堂平助と同年くらい青年。こちらは藤堂に比べて背がやや高く、人並みにこの座敷を楽しんでいる様子でございました。

苦虫を噛み潰したような顔をしている年長者とは対照的に、最年少の青年はその腕の内に、芸妓の水菊……ではなく、それに付いてきていた禿のあやめを抱きかかえ、幸せそうな表情を浮かべているではございませんか。

「ちっちゃい！ 可愛い！ 何この生き物、腕の中にすっぽりとか、凄まじく可愛いよ新八さん！！ 何で今までこんな可愛い生き物紹介してくれなかったの！？ 歳三さんもそう思いますよね！？」

「……思わねえよ」

「まあ、あやめちゃんが可愛いのは認める。……だがな、総司。普通は芸妓の姐さんとか、酒とかを楽しむ場だと思っただよ、島原って」

「まあ、少なくとも禿のガキを抱きかかえて可愛がるような場所じゃあねえな」

ぶかりと煙を吐き出しながら、歳三と呼ばれた年長者は、冷たい視線を総司と呼ばれた青年に送るのでございます。

年長者の方の名は土方歳三。新撰組の「鬼の副長」と名高い一方で、その端正な顔立ちから京の街の女性にも人気が高く、こと島原においては、1度は彼に呼んでもらいたいと言う芸妓も数多く存在している中、本人は全く意に介せず、「仕事の鬼」とさえ言われております。

そしてあやめを抱え、ずっと頬擦りしている彼の名は沖田総司。

永倉同様、新撰組の幹部隊士であり、腕も隊の中で1、2を争うとさえ言われております。隊の中では無類の子供好きとも言われ、よく近所の子供と遊んでいると言う話を耳にするのでございますが……

「歳三さん！ この子屯所に連れて帰りましょう！ 可愛いです！」

「あ？ 駄目に決まっただろうが。何言っただ寝言は寝て言え」

「ええええええええっ！？ 何で駄目なんですか歳三さあん。こんな可愛らしい生き物、連れて帰らないなんて罪ですよ、罪！！ 局中法度に反します！」

「いや、むしろ連れて帰る方が局中法度的に不味……おい総司

！ お前少し力緩めろ！ あやめちゃん死ぬからっ！」

「あ」

永倉に言われて見下ろせば、沖田の腕に囚われているあやめは、顔を蒼白く変色させて白目を剥き、更には口から小さくも苦しげな声を漏らしております。

そこでようやく自身の腕に込めた力が強すぎた事に気付いたのでしょう。沖田はさっと顔を青褪めると、即座にあやめの体を放したのでございました。

「うわあああん、ゴメン！ 僕、加減を知らないからつい！」

「ほ…… 本気で殺されるかと…… 思いましたえ？」

解放された事でようやく全身に血と酸素が行き渡ったのか、あやめは畳に膝を付くと、ゲホゲホと咳き込み、涙目で沖田を見つめながら言葉を返すのでございます。

無論、「闇の者」である彼女の体は、通常の禿よりは頑強に出来ております。しかしながら、それでも身体は見目通りの童女である事には相違ございません。大の大人……それも日頃より鍛錬を積む、新撰組の幹部格の男に力いっぱい抱擁されれば、呼吸困難にもなるうと言つ物。

あやめが置かれていた状況は、「死にはしないが、死ぬほど苦しい」と言えましょう。

「本当にごめんね。ちっちゃい生き物を見ると、我を忘れちゃうんだよ、僕」

はは、と照れたように笑いながら、沖田は未だ咳き込んでいるあやめの頭を軽く撫でて言うのでした。

恐らく彼にとって、あやめの存在は犬猫と同じ様な感覚なのでございましょう。

「いや、いつも加減を知らねえだろ、お前」

「あ、歳三さん酷い。加減してるから、いつもちゃんと不逞浪士を斬らずに生かしているんじゃないですか。何も考えずに殺していたら、新見さんと同じです。それは先生にも敬介さんにも嫌われるので、しません」

紫煙と共に吐き出された土方の言葉に、沖田は頬を膨らませながら答えを返します。

その言葉……正確には「新見」と言う名に反応したのか、舞を終え、永倉に酌をしていた水菊が軽く眉を顰めたのでございました。

「こんな事、新撰組の方に言うのは良くないてわかってますけど……新見はんで、島原でも有名な乱暴なお方ですよ？　一緒に古稽古習うてる子あが、昨日も新見はんに殴られたあ言うて頬を腫らしてましたえ」

その水菊の言葉を聞いた瞬間。客である3人の纏う空気が、ピンと張り詰めたのでございます。

その事に気付きながらも、そこは島原の人間。彼らの放つ緊張感に気圧される事なく、いつも通りの艶やかな表情を浮かべ、水菊は

他の2人にも酒を注ぎ、あやめも座敷の隅で空いた徳利の数を数えるなどして、それに気付かぬフリをするのでございました。

花街は様々な情報が集る場所。ですがそこに住まう者達が、自分でその情報を生かすような事は滅多に致しません。それは彼女達が芸で身を立てている者だからと言うのもございますが、それ以上に情報が持つ恐ろしさを知っているからでございます。

見知った情報を生かすも殺すも己次第。生かせば花街と言う苦界から逃れる術にもなるかも知れませんが、大抵の場合は失敗して己に返ってきてしまうのです。

失敗の代償は様々ですが、それがどんな物であれ、割に合わぬ事は明白。

島原の外の事には首を突っ込まず、相手が誰であれ聞かれた情報は小出しにする。それが花街と言う名の「檻」の中で生きるヒトの暗黙の掟^{ルル}。

その事は永倉達も存じているのでしよう。気付かぬフリをしている水菊に視線を向け、さりげなさを装いながら問いを投げたのでございます。

「なあ水菊さん。それはどこでの話か分るか？」

「へえ、祇園新地にあります、『山緒』言う料亭の前やて聞いてますう」

「『山緒』か……」

苦いのは煙草か、それとも水菊の言葉か。

彼女の答えに、土方は更に苦々しい表情を浮かべ、再び煙と共に言葉を吐き出すのでございます。

「……芸妓さんが殴られたのが昨日と言う事は……まだそこにいるかもしれませんね」

「ああ。総司、永倉。戻るぞ」

「了解。……悪いな水菊さん、あやめちゃん。折角置屋から来てもらったのに」

「はあい。またね、ちっちゃい生き物ちゃん」

土方の短い命令に返しながら、永倉は申し訳なさそうな、そして沖田はどこか楽しそうな表情を浮かべ、それぞれ座敷から去っていくのでございました。

その背を見送りながら。あやめは何か、奇妙な予感めいた物を覚えるのでございます。

胸焼けのような、眩暈のような……嫌な感覚を。

「……銀」

己のその感覚を信じたのでしょうか。彼女はすつと窓辺によると、呟くような声で銀彌の名を呼んだのでございます。

常人では聞き取れぬであろうその声は、しかし窓の下、「縁屋」の入り口に立っていた銀彌の耳に届いたのか、彼は声に応える様に顔を上げると、そのままひよいと座敷の窓の外……日除け代わりの屋根の上へと飛び上がったのでした。

「どうした、お嬢？」

「恐らく、新撰組は新見某を処刑する気だろう。……悪いが『山緒』に行つて来てくれないか？」

「それは構わねえけど……」

「お姉ちゃん、何ぞ気になる事でもありますのんえ？」

帰り支度を整えながらも、あやめの言葉を聞いていたのでしょうか。水菊が不安そうな目で彼女の顔を覗きながら、口ごもる銀彌に代わる様に問いを続けるのです。

それに対し、あやめも軽く眉を寄せ……

「……念の為だ、新見某の『死亡』を確認してきて欲しい」

「それってつまり……新見はんが、『闇の者』かも知れて事どすか？」

「あくまで私の予感だ。確証は無い」

水菊に返したあやめの言葉に、銀彌はふと口の端を吊り上げ……

「了解。オレはお嬢の番犬だからな」

そう短く言葉を返すと、そのままくると背を向け、長身からは予想も付かぬ身軽さで屋根から屋根へと飛び移り……あつと言つ間

にその姿は見えなくなったのでございます。

その様は、天領のお庭番もかくやと言わんばかりの速さ。残っているのは彼の持つ銀の髪が弾いた小望月の光の軌跡のみ。

——杞憂であれば良いのだが——

心の内で呟きながら、晴れぬ表情で闇に消えた銀彌を見送るのでございました。

永倉達が「縁屋」を出てから数刻後。

料亭「山緒」の一室は、噓せ返る程の血の臭いに満ちておりまして。

踏み込んだ時には既に幾人かの浪士が血に塗れて息絶えており、その真ん中では返り血に塗れた新見が、高らかな笑い声を上げて立っていたのでございます。

その彼が、踏み込んできた者……土方、沖田、藤堂、原田、そして永倉の姿を見止めると、特に驚いた様子もなく、いっそ穏やかさすら感じる笑みを浮かべたのでございます。

「こんばんは。君達も遊びに来たのですか？　しかし申し訳ありません、既に獲物は全て狩ってしまいました」

獲物と言うのは、彼の足元に転がる数多の亡骸の事でございましたか。新見はニマリと奇妙な笑みを浮かべながらも、傍に転がる亡骸の顔を軽く蹴って、彼らの方へと向けたのでございます。

向けられているのは苦悶に満ちた表情。翩り殺しにされたのか、腕は助けを求めるように前に伸びてはいる物の、どの亡骸も肘から先はそこから離れた場所に散っております。

彼らの足も、膝から下は別の場所へ切り離されており、部屋の隅で山と積まれているではございませんか。

不逞浪士とは言え、ここまでされなければならぬ理由は無いはず。更に言えば、新見の足元に積まれた屍の山が不逞浪士であると言う確証もない。もしかすると、ただの浪人であつた可能性は否定しき

れないのでございます。

そんな残酷な振る舞いを起こした彼に、何を思ったのか。新見を除く皆の面から、表情らしい表情が消え、その代わりに体から殺気を迸らせるのでございます。

「……獲物、ねえ。それならまだいるぜ。……あんたがよお」

槍を構え、真っ直ぐに相手を見やりながら原田が言い。

「やつぱり俺、新見さんとは話が合わないや」

刀を抜き、揺ら揺らと上半身を揺らしながら藤堂が呟き。

「僕は平助とちよつと違うかな。新見さんって、いつも血の臭いをさせてるから……嫌いだよ」

柄に手を当てたまま、沖田は小さく吐き捨て。

「イカしてる、と言った方が良いんだろうな。あんたの場合」
鞘に手を当てた状態で、永倉が苦々しい声を出し。

「……新見錦。局中法度に背いたとして処分する。其処もとの罪状は『土道不覚悟』。今ここで切腹するか、それとも斬首か。好きな方を選べ」

そして仁王立ちになっている土方が、事務的に告げたのでございます。

一方で告げられた方は……何故か嬉しげに目を細めると、くつくつと喉の奥で笑い……

「やれやれ。もう少し勝手気儘にやれるかと思っていたんだけどねえ……残念、ここまでと言う事か」

己が手に付いた「どこかの誰か」の血を軽く舐めながら、彼は恐れた様子も見せず、ただ楽しげにそう言ったのでございます。

手に持っている刀を構える様子もなく、まるで悪戯を怒られた子供のように、ひよいと肩を竦めて。

「新撰組は、あんたの玩具じゃねえんだよ」

「いいや。玩具だよ。私が血を見る^{遊ぶ}為に存在する玩具だ」

ニイと口と目を弓のような形に歪ませながら、新見は土方の言葉にそう返します。

その顔は、永倉の言う通り「イカレている」と表現するのが最も相応しいと思える程の歪み具合。返り血に塗れているせいなのか、余計にそう見えるのかもしれませんが。血を見る事を「遊び」と称すその様は、永倉が見てきた「闇の者」……「堕人」を連想させます。ですが、永倉が出会ってきた「堕人」のように理性を失っているようには見えません。理性がありながらも、血を好む。典型的な辻斬りと言っても過言では無いでしょう。

ただ性質の悪い事に、その「辻斬り」が公的に認められる組織である「新撰組」に属していると言うだけで。

「ま、良しさ。充分遊んだと言って良い。それじゃあここらで、君らの望み通り、新見錦の人生の幕引きとしようかな」

それと同時に、彼は手の中にある刀を何の躊躇いもなく付きたてたのでございます。

……己の首に。

「……自分で、首を斬^ぐろ^ぎう。こんな風に……ね」

首に対して垂直。真正面から見て漢数字の一を書くかのように突き刺された刀。

よもや自身の首を貫くとは思っていなかったのでもうございましょう。土方達はぎょっと目を見開き、口の端から血を流す新見の顔をまじまじと見つめる事しか出来なかったのでもうございます。

刀は完全に彼の氣道を貫いており、そのまま前に押し出せば、確実に頸動脈を断ち切って彼の中に流れる血潮を噴出させる事でしよう。

それでも新見の顔に浮かぶ狂気めいた笑みは、消えるどころかますます楽しげに歪むのです。

——自分で、自分を……斬首するって言うのかよ……！？——

切腹か、斬首。選べと言ったのは土方でございましたが、通常「自害」と言えば切腹が主。戦国の世では非力な女は喉を突いたと言われておりますが、それでも「斬る」訳ではございません。

その異様な光景に、身じろぎ1つ取れぬ面々に向かい、新見はこ

れでもかと言わんばかりに目と口を細め……そして一息に、刀を前に押し出したのでございます。

瞬間、彼の首から紅い水が吹き上がって天井を濡らし、その主は背後に倒れながらも、その「紅」を恍惚の表情で見やり……

「ああ……実に美しい……血の色だ……」

倒れる直前。

そう呟いて……新見錦は動かなくなったのでございます。

……文久3年、文月の14日の事でございました……

新見錦が亡くなった翌日。

「お使い」と言う名の「散歩」に出ていたあやめは、またしても新撰組の屯所である前川邸の前を歩いておりました。

深い理由があつた訳ではございません。単純に帰り道だったと言っただけでございます。

無論、新見の死が新撰組に及ぼす影響が気になった事は確かでございますが、所詮は組織内の問題。あやめが気にしたところで、何があると言つ訳でもございません。

そして、前川邸の前を通り過ぎようとした瞬間。彼女の前に、大柄で体躯の良い男性……芹沢が姿を見せたのでございました。

互いに互いの存在を認識していなかったのでございましょう。一瞬ぎよつとしたように目を見開き、しかし次の瞬間には、やはり互いにふと目元を緩ませて挨拶を交わすのでございました。

「おお、童……確か名はあやめ、だったか。久しいな」

「お久しゅう、芹沢はん。……どないしりましたん？ 何ぞ顔色、悪いどすえ？」

見上げた先にある芹沢の顔は、以前出合つた時とは比べ物にならぬ程、精彩を欠いておりました。

目の下には隈、顔は土気色。一応食事は取っているのか、頬がこけていると言う事はございませんが、足元は随分とふらついており

ます。

酔っていると言う可能性も無くは無いのですが、あやめの鼻には酒気を感じ取る事は出来ません。

純粹に、ふらついているのだと理解すると、彼女は心配そうに声をかけたのでございます。

「何か、悩み事ですか？　うちで良ければ、相談に乗りますえ？」

これでも島原の女、口は堅い方ですえ」

「……俺の腹心である新見君が、昨夜……亡くなった」

「……切腹されたて、聞いてますう」

「流石に、島原の女。情報が早い」

彼女の言葉に何を思ったのか。芹沢はポツリと、吐き出すように言の葉を紡ぎだすのでございました。

新見が「亡くなった」と言うのは、あやめも聞き及んでおります。そして新撰組の公表している「切腹」が事実では無い事も。

自害は自害でございますが、実際は己の首を切り裂いたのだと、昨夜「山緒」に潜ませていた銀彌からそう報告を受けております。

「俺の腹心だ。本来なら、その死を嘆き、悲しむべきなのだろう。

……だがなあやめ、俺はそうは思わなかったのだ」

前川邸に入り、その縁側に向いながら。

彼はあやめにだけ聞こえるような小さな声で、独り言のように言葉が続けるのです。

「俺はそれを聞いた瞬間……ほっとした」

縁側に座り、そして自身の膝の上にあやめを座らせて。彼女の髪を軽く撫でながら、芹沢は暗い表情で呟きを落とすのでございます。

一方であやめは、何も言わず、芹沢の為すがまま、その声に耳を傾けます。

聞いてくれるだけで充分なのか、芹沢は何の反応も返さない彼女を不快に思うでもなく、ぽつぽつと、降り始めの雨のように断続的に言葉を漏らし続けるのでした。

「酷い話だ。腹心、腰巾着、そのように扱っておりながら、俺は心

の中で彼の存在に恐怖していた。だから、だろうか。……死んだと聞いた時に感じたのは安堵だ」

そう言って、あやめと初めて出会った時に見た新見の笑みを思い出したのか、芹沢は一瞬だけその身を震わせると、きつく目を閉じて瞼の奥に潜む幻を、耳の奥に残る厭らしい声を、消し去ろうと頭を振るのです。

既にこの世から消えた、亡霊だと自身に言い聞かせて。

それでも、そう言い聞かせる自分に後ろめたい物を感じているのでしょうか。芹沢は弱々しい笑みを浮かべると、どこか自嘲めいた色を含んだ声で、言葉を吐き出すのです。

「……………俺が壊れる前に、奴が壊れてくれて……………嬉しいとさえ思ってた」

そこまで聞いて。あやめはようやくその口を開いたのでございました。

「……………ほっとしてるの、悪い事やて思うてはるんどすか？」

「それはそうだろう。死者を貶めるような真似はあつてはならないと、俺は思っておる。仮に表面だけであつたとしても、俺を慕っていた相手なら、特に」

「そうやって背負い込んでたら、ぽつきり折れてしまいますえ？」

それこそ、芹沢はんが壊れてしまうよおな気がします」

ぽんぽんと、今度はあやめが芹沢の頭を撫でながら、言葉を返します。

芹沢が見た彼女の顔は、優しげで……………しかしそれでどこか寂しげな、何とも言えぬ表情。それは、およそ齡10の子供が浮かべられる物ではなく……………酸いも甘いも噛み分けた者が浮かべるそれであるように見えるのでございました。

「怖い物が無^のうなつたら、ほっとするのは当たり前前の事です。少なくとも、うちはそうや。だから、少なくともうちは、芹沢はんの事、怒ったり責めたりしまへんえ」

相手の方が子供なのに、まるで自分の方が子供に返ったかのよう

な錯覚に陥りながら、芹沢は彼女の言葉を噛み締めます。

子供ゆえに真っ直ぐな様にも、茨の人生を歩んできたが故の様に
も聞こえる、その言葉を。

——怖い物がなくなったら、ほっとするのは当たり前、か——

「そうか……そう、だな。少し、気が楽になった」

そう言つと、芹沢はふと口元に柔らかない笑みを浮かべて、彼女の
髪を再度撫でるのでございます。

そして、自身の膝から彼女をゆっくりと下ろすと、どこか晴れや
かな表情で立ち上がり……

「今日は新見君を埋葬せねばなので、送れんが……また遊びに
来い、あやめ。八木の子供も、お前と遊ぶのを楽しみにしておった」
「へえ。また、是非に」

芹沢の言葉に、ぺこりと頭を下げ……そして、あやめは「縁屋」
へと戻って行くのでございました。

……そんな彼女の後姿をじっと見つめる何者かの気配に、全く気
付く事なく……

その4：文久3年、文月・参

前川邸を出て少し歩いたところで。

ポンと、あやめは背後から肩を叩かれたのでございます。

気配も前触れも無く起こった唐突なそれに、あやめはびくりと体を大きく震わせ、反射的に睨みつけるように背後を振り返ると、そこには人の良さそうな笑みを浮かべた色白の男性の姿。

浅葱色の地に、白で「誠」の文字が染め抜かれている隊服を着ている事から、紛^{まご}う事なき新撰組の隊士でありましょう。

「ああ、失礼。驚かせてしまいましたね。そんなに警戒しないで下さい」

睨むあやめに、相手は心底申し訳無さそうにそう言うと、彼女の髪……正確にはそこにささる簪に手を伸ばし、それをちょいちょいと弄ったのでございます。

その仕草で、己の簪がずれていた事に気付いたのでございましょう。あやめは少しだけ目付きを和らげるとその男性の顔をじつと見つめるのでございます。

齡30前後、背丈は芹沢や銀彌に比べれば高いとは申せませんが、柔和な笑みと隊士特有の凛とした雰囲気相まって、人間的に大きな器を持っているように思えます。

かけている眼鏡のせいとか知的な印象も受け、羽織さえ着ていなければ寺子屋の先生に見えた事でございましょう。

「はい。これで元の可愛らしい禿さんになりましたよ」

「おおきに」

ぺこりと頭を下げると、簪がシャンと音を立てたのが聞こえます。聞き慣れているはずのその音を聞くと、やはり先程まで簪がずれていたのだと実感できるのです。

恐らく、芹沢に撫でられた際にずれたのでしょう。気に留めていなかったのは、外見も気にする島原の者としてはあまりよろしくな

い事でございます。

情けないような恥ずかしいような気分になりながらも、あやめはそんな考えは顔に出さず、ただにっこりと笑うのでした。

「その帯の刺繍は、百花さんの所の禿さんですね。ちょうど時間が空いていますし、お送りしましょう」

「おおきに。……それにしても珍しおすなあ、帯の刺繍だけでこの子おか分るなんて」

「京の治安維持を任されている身ですから、全て把握するくらいの事はしませんと」

島原の芸妓達の帯には、どこに属しているか分るように、それぞれの置屋毎に「紋」とも言える刺繍が施されております。

ですが、島原の置屋の数は決して少なくはございません。普段から寝起きしている芸妓達ならともかく、京に来て数ヶ月程しか経たぬ新撰組の隊士が把握していると言うのは、かなりの努力と記憶力の賜物と申せましょう。

「……お兄はん、凄いお人どすなあ……」

「ありがとうございます。記憶力が取り得のような物ですから」

あやめの純粋な感嘆に、相手はふわりと笑うと、気恥ずかしげにずれた眼鏡を上げるのでした。

その様子を見る限り、あまり好んで戦おうとする人物のようには見えません。ただ、見えぬだけであると言う事はあやめも重々理解しております。

眼鏡を押し上げる手には、剣胼胝が出来ており、刀に置いている左手には抜刀の際に出来たらしい小さな傷が消えぬ痕となつて残っているのですから。

「ああ、申し遅れました。私は山南敬介と申します。禿さんのお名前は？」

「うちは、あやめ言いますう。よろしゅうお頼申しますう」

「あやめさん……」と言え、日頃永倉君がお世話になつてゐる禿さんですね。昨日は沖田君が可愛いと騒いでいました」

言いながら、山南と名乗ったその男性は、ほんの少しだけ苦笑めいた表情を浮かべたのでございます。

昨日の座敷での沖田の様子から考えて、本当に「騒いで」いたのでしょうか。

「小さい生き物」と言われるのは、齢400を越えるあやめにとつて、正直屈辱ではございますが、事実なので何とも申せません。小さいからこそ人の警戒心が解かれているのも、事実なのですから。

「あやめさん」

「へえ？ 何どすえ？」

「……………先程は、芹沢さんを慰めて下さって、ありがとうございます」

唐突に紡がれた言葉に、あやめはきょとんと目を見開いて山南の顔を見上げます。

いつから、どこから見ていたのか。肩を叩かれるまで気配も感じなかった事を考えると、やはり見た目通りの柔和なだけの男性では無いのでしょうか。

人の気配に敏いあやめが、彼の存在に気付けなかった。仮に山南があやめの「敵」に回っていたらと思うと、彼女の背に冷たい物が走ったのです。

「新見がいなくなった事で、芹沢さんも少しは落ち着いて下さると良いんですが……………」

小さく、あやめに聞かせるつもりではなかったらしいその一言に、彼女は鋭い棘のような物を感じ取りました。

恐らく、他の者に対しては「さん」や「君」と敬称を付けているのに対して、新見だけは呼び捨てをしているからなのかもしれない。

——そう言えば、山南君と新見某は壮絶に仲が悪いと聞いた事があるな——

いつだったか、原田がその様に言っていたのを、襖越しに聞いた

記憶がございます。

新見と言う人物がどう言った者だったのか、自ら首を斬ったと言う今となつては、確認のしようはございません。しかしながら、芹沢や山南の反応や、新撰組が「肅清」に向つた事を考えれば、おのずとその人物が、あまり好ましいとは言えない存在であつた事は想像に難くありません。

昨夜の一部始終を覗き見ていた銀彌ですら、新見と係わり合いになるような事にならなくて良かったと、心底ほつとしたように言つていた程。

自ら首を裂き、己の血を見て笑いながら倒れたと言う相手。亡骸は消えず、本日埋葬されると言う話でございますので、「闇の者」ではなかつたのだと言う結論に達したのですが……

それでも、何故かあやめの胸の内には、未だざらりとした感覚が残っているのです。

そんな風に考え込んでいる内に、いつの間にかあやめと山南は置屋の前に辿り着いておりました。

「それでは、私はここで失礼します。お稽古は厳しいと思いますが、頑張つて下さいね」

「へえ、おおきに。山南はんも、気をつけておくれやす」

「ありがとうございます」

ふわりと穏やかな笑みを見せ、山南は軽くあやめの髪を撫でると、踵を返して八木邸へと戻つていったのでございました。

欠けたる部分の無い月が、前川邸の縁側を照らし。その月を見上げながら、芹沢鴨は酒を呷つておりました。

折角の中秋の名月であるにも関わらず、新見錦の埋葬をしたせいか、純粹に月と酒を楽しむ気にはなれません。

それでも、昼間にあやめと出会えた事が良かったのか、荒れると言ふ事はございません。

いつもは己の内で常に燦る怒りの炎も、今だけは穏やかに凪いで
おりました。

ですがそんな芹沢の心とは対照的に、秋の夜風が唐突に吹き始め
たかと思うと、風が運んできたらしき雲が、天に浮かぶ満ちた月を
覆い隠したのでございます。月の放つ柔らかな光は雲の厚みに遮ら
れ、周囲は寒気と闇、そして静寂に支配されたのです。

——ああ、折角の月が……——

雲と言う無粋な邪魔が入った事に溜息を吐きながら、芹沢は手元
の杯に残る酒を一息に呷ります。

酒特有の仄かな辛味。そして喉を灼くような熱さ。一息に呷った
事で酔いが回り始めたのか、芹沢の視界が、微かにぼやけるのです。
闇が徐々に一箇所に固まり、それが人の形を為していく様に見え
始めたではございませんか。

最初は、もう酔ったのかと苦笑気味に思う程度でございました。
ですが、闇がはつきりと人の姿を作り上げていくにつれ、芹沢の体
に冷たい物が走ったのでございます。

有り得ない、そんなはずは無い。そう思いながらも、芹沢はその
人影から目を反らす事が出来ずにあります。

闇が作り上げたのは、墨を流したような黒髪を持った、優男風の
好青年。ですが奇異な事に、その青年の喉は裂け、そこから赤い液
体が止め処なく流れ落ち、鉄錆のような臭いを周囲に撒き散らして
いるのです。

ですが己の首の事など気に留めた様子もなく。「それ」は奇妙な
笑みを顔に貼り付けて芹沢に視線を向けるのでございました。

「こんばんは、芹沢先生」

裂けた喉のどこから声が出ているのか。……新見錦の姿をした「
それ」は、いつも通り嫌な笑みを浮かべると、慇懃無礼な態度で一
礼を致します。

頭を下げた拍子に、彼の者の首からは、ぼたりと血が音を立てて
地に落ち、紅葉とは異なる「赤」で土を染めるのでございます。

その、あまりにも現実味に欠けた様に、芹沢は恐怖を覚えたのでございましょうか。酔いは醒め、口の中は乾き、そして己の中の血がざあつと音を立てて引いていく感覚。

それでも、新撰組筆頭局長としての矜持からか、真っ直ぐに「それを睨み返すと、掠れた声で問うたのです。

「新見……貴様、死んだはずであろう!？」

「ええ。自ら首を裂きまして。……だからこそ、こうして先生の夢枕に立っているではありませんか」

「夢、だと?」

ニヤニヤと笑う新見の言葉をそのまま返し、芹沢は周囲を見回します。

前川邸の縁側にいたはずなのに、首から血を流す男と自身の姿以外、いつの間にやら何一つ認識できぬ黒で染められておりました。

前後左右は勿論、上下すらも曖昧な感覚は、夢と言われれば納得のいくもの。

そう思えば幾分か安堵する反面、どうしてこんな夢を見ているのかと言う疑問も浮かぶのでございます。

——なんと酷い夢を見ている事が——

芹沢の夢であるが為なのか、新見は口の端を思い切り吊り上げると、ゆつくりと芹沢に近付きながら言の葉を紡ぐのでございました。

「冷たいお方だ。私が死んでほつとした、などと」

するりと。闇の中を滑る様にして、新見は芹沢の前に近寄ると、鼻の頭が付くほど近くまでその顔を芹沢に寄せたのです。

瞬間、眩暈すら覚えるほど強烈な血の臭いが芹沢の嗅覚を蹂躪し、吐き出される生温かい息が体に纏わり付いて触覚を弄り、恨んでいるようで、しかしどこかそれを楽しんでいるような声が聴覚を支配し、そして血色に染まっている瞳が視覚を奪うのです。

触れている部分は鼻頭だけだと言うのに、何者かに縛されたように芹沢の体は動かず、ただただ荒い呼吸を何度か繰り返すのみ。

そんな芹沢に追い討ちをかけるかのように、新見はにたりと笑う

と彼に囁きを落とすのでした。

「ずうつとあなたに付いてきた私を見捨てて、今更あの甘ったるい近藤君達に擦り寄るおつもりですか？ …… 先生がそんなに酷い方だとは思いませんでした」

「な、あ……」

「どこへ逃げると言うんです？ あなたにはもう、後が無いと言うのに」

無意識の内に、芹沢の足は新見から距離をとろうと下がって行きます。ですが下がっても下がっても、逃がさないと聞いたげに、新見は同じだけ歩を進め、芹沢を追い詰めるのでございました。

そして「後が無い」と言う言葉をそのまま表現したかのようになり、急に視界が開けたと思うと同時に、芹沢の背後の地面が無い事に気付くのです。

それはまるで断崖絶壁。しかし常ならば下に広がるのは地面か海のはずなのに、そこにあるのは底の無い闇でございます。

揺ら揺らと蠢くそれは、芹沢が落ちるのを、今か今かと待ち構えているよう。

そして目の前の存在は、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべ、芹沢の肩にその手を添えたのです。

…… 彼を、下へ突き落とす為に。

そうだと気付いた時には既に遅く。トン、と言う軽い音と共に芹沢の身は宙を舞い……

「もう、闇に堕ちるしかないんですよ。先生」

耳元で楽しげに響いた声に。

芹沢が落ちながら感じたのは…… 誰かに対する「怒り」でございました。

月は欠け、空に浮かぶは17日目の立待月。たちまちつきそれを、いつもの「縁屋」ではなく「角屋」の廊下から眺めながら、あやめは追加の銚

子を運んでおりました。

今宵水菊を呼んだのは、芹沢鴨。彼は永倉を同行者を選び、水菊と他数名の芸妓を呼び、かなりの速度で銚子を空けておりました。慣れぬ店の中、禿であるあやめは右往左往しつつ、他の禿と協力しながら酒を運んでいたのです。

――酒が好きな男だとは聞いていたが、ここまでとは――

半分呆れながらも、あやめが水菊の入る座敷の前に着いた、刹那。ゴツと言う鈍い音が中から響いたかと思うと、次の瞬間には襖を破って一人の芸妓が文字通り飛んできたのでございます。

それが、水菊と共に呼ばれた芸妓の1人であると気付くと同時に、今度は切羽詰ったような永倉の声が飛んだのです。

「水菊さん!!」

「きゃあっ!!」

永倉の声に被るようにして、バシンと言う大きな音と、水菊の悲鳴が同時に上がったのでございます。

飛んできた芸妓を助け起こしながらも、何事かと思い中に目をやれば。

そこには、顔を真っ赤に染めて仁王立ちになっている芹沢の姿がございました。顔に浮かぶのは鬼神が如き憤怒の表情。

芹沢の周辺は、あやめが到着するまでに大暴れでもしたのか、食器の類はひっくり返り飾ってあった掛け軸は破られ、そして芸妓達は皆苦しげに呻いているではございませんか。

「俺は! 新撰組筆頭局長、芹沢鴨であるぞ! 俺の言う事が聞けんと申すか!」

びりびりと空気を震わせて発せられた怒声に、中にいた芸妓をはじめ、周囲の座敷にいるらしき者達も緊張しているのが伝わります。「芹沢さん! いくらなんでも今回は無茶だった!」

「黙れ、永倉!! 一介の隊長格が、局長であるこの俺に指図するか!」

「指図じゃない、一般論だった!」

「喧しい！ 貴様など……壊れてしまえ」
「がっ！？」

必死に宥めようとする永倉にさえも、芹沢は持っていた黒ずんだ色の鉄扇を振り下ろしてその頬を勢い良く張り、その勢いに負けた永倉の体が軽く飛んで床に叩きつけられます。

恐らく他の芸妓達も同じ様に鉄扇で殴られたのでございましょう。男である永倉すら飛ぶ程の衝撃なのですから、芸妓が吹き飛ぶのは当然と言えましょう。

——酒乱、とは聞いていたがこれ程の物か！？——
同じ事を水菊も思ったのでございましょうか。ゆつくりと身を起こしながらも、彼女は芹沢に真っ直ぐな視線を送ったのでございませう。

睨むと言つ訳でもなく、哀れむでもなく。どちらかと言えば呆れの混じったような視線。あやめにはそう見えた視線を、しかし芹沢は睨んでいるとでも見えたのでございましょうか。ひくりとこめかみをひくつかせると、再度水菊に向って大きく鉄扇を振り上げたのでございます。

「何だ、その反抗的な目は。まだ仕置きが足らぬか！？ ならば望み通り、徹底的に破壊してくれる！」

「菊！」

芹沢の鉄扇が振り下ろされたのと、あやめがその線上に飛び込んだのはほぼ同時。

彼女は芹沢と水菊の間にその身を滑り込ませると、自身が持つ普通の扇を使って芹沢の鉄扇の軌道を反らし、睨みつけるように芹沢の顔を見上げるのでございました。

「……………お姉さん達や永倉はんへの乱暴、これ以上は堪忍しておくれやす」

「小娘、貴様も俺の邪魔をするか」

その言葉、向けられた視線、そして先程ずらした鉄扇その物の存在に。あやめははっと息を呑みました。

——彼は私を……いや、この場に居る全ての者を認識していない。
それどころか……

向けられている視線はどこか虚ろ。「見えてはいる」のでござい
ましようが、「見ている」とは言い難いような印象。

それは、大切な「何か」を失った者特有の瞳である事を、あやめ
は存じております。

大切な人、大切な物、大切な感情。いずれかを失い、自身に失望
し、世を疎ましく思った人間が浮かべる彩。そして、その彩を浮か
べる者の末路もまた、彼女はよくよく存じておりました。

——この数日で、何が起った。何故、気付けなかった——

ギシリ、と悔しげに奥歯を噛み鳴らしつつも、あやめは極力抑え
た声で言葉を紡ぐのでした。

「芹沢はんの邪魔はしてまへん。うちは、うちのお仕事をしている
だけどす」

「何い」

「うちの……禿のお仕事は、お姉さんのお世話どす。お世話の中に
は、お姉さんを怪我させん事も含まれとります」

「ならば、小娘。……貴様がまずは壊れるか!？」

言葉と同時に、芹沢が繰り出したのは……鉄扇ではなく、蹴りで
ございました。

てつきり鉄扇が来ると思っていただけに、反応の遅れたあやめの
鳩尾に芹沢の足が綺麗に入り、彼女の小さな体は、壁に激突するま
で勢い良く飛ぶのでございます。

「うつ……」

「弱き者が壊されるのを見るくらいならば、この俺が壊すまで。破
壊が呼ぶ先が見たい。滅亡なのか……再生なのか」

体をくの字に曲げ、ゲホゲホと咳き込むあやめに近寄ったかと思
うと、芹沢はゆっくりと鉄扇を振り上げながらそう呟いたのでござ
います。

相変わらず、何も映さぬ瞳を、彼女に向けたままで。

しかし彼女は、それをじっと見つめると……口元に、ふと不敵な笑みを浮かべ、芹沢の目を真つ直ぐに見つめ返したのでございます。そして、芹沢の鉄扇があやめの頭めがけて振り下ろされたその時……君には出来まいよ」

芹沢の鉄扇を反らそうともせず、あやめは斯様な眩きを落としたのです。

その声を聞いた瞬間、芹沢は振り下ろした鉄扇をあやめの頭に当たる直前で止め、まじまじとあやめの顔を見返すではございませんか。

見つめ返す芹沢の瞳がゆらりと揺れ、それまで何も映さなかった瞳が、徐々に「あやめ」と言う存在を認識し始めたのです。

まるで今まで焦点が合っていなかったかのように数回瞬きを繰り返し……

「……あやめ？ 俺は、今何を……」

ようやくその目があやめを映したのでしょう。芹沢は心底不思議そうな表情を浮かべて周囲を見回し……そしてその惨状で、己のした事を思い出したのでございましょう。

再度顔を真つ赤に染めて怒りの形相を浮かべると、あやめにくるりと背を向け……

「興が冷めた。帰る」

短く、吐き出すようにそう言うと、芹沢はそのまま座敷から出て行ったのでございます。

それまで場を支配していた緊張感が、ようやく緩み。それまで呆然と見ていた芸妓達は、今更のようにガタガタと震えだし、水菊と永倉は心配そうな表情であやめに駆け寄るのでした。

「あやめちゃん、大丈夫ですか？ お怪我は！？」

「本当にすまない。芹沢さん、ああいう人で……不快だっただろ？」

「……菊に怪我を負わせた事は許し難いが、それはこの際横に置いておこう。問題はそこではない」

俯き、どこことなく震える声で。あやめはそのまま、言葉を続けま

す。

永倉にとって……そして彼女にとっても、信じたくない言葉を。

「非常に言い難い事だが……芹沢鴨は、『闇の者』へと堕している」
彼女のその言葉に、一瞬だけ沈黙が降り……しかし直後、永倉は慌てたように声を上げるのでした。

「ちよつ、ちよつと待つてくれ。そりゃあ、確かに言動に難のある人だけどき、見て分るだろ？ 芹沢さんはごく普通の人間だぜ？

この前の『鬼女』や、『闇の腕』なんかとは全然違う！」

「人から堕した者は、確かに異形と化す事が多い。しかし、稀に人の形を保ったまま『闇の者』に化す存在もいる」

「じゃあ、根拠は！？ 何を以って、芹沢さんが、そんな……」

「只人には見えんだろ？ 彼は鉄扇に闇を纏わせ、威力を……破壊力を上げていた。皆がこの程度で済んだのは僥倖と言う他無い」
僥倖と言いながらも、あやめの口調はいつもの淡々とした物ではなく哀しげで……だからこそ、永倉は知るのです。

彼女の言葉に、偽りが無い事を。

そして、彼女自身がそれを止められなかった事を悔んでいる事も。
「殺す、のか？」

「そうだ。既に彼の時は止まってしまっている。ひどく残念な事ではあるが、あまり長くは放置出来ん。……彼の為にも」

襖が吹き飛んだ事で見える立待月を見上げながら。

あやめはきつく拳を握って、苦しげにそう宣言したのでございまして。

その5：文久3年、文月・肆

「……新撰組は、阿呆なのか？」

置屋の最奥、「お母さん」である百花の部屋で。その百花から聞いた言葉に、あやめは力の限り顔を顰めて返したのでございました。……芹沢鴨が「角屋」にて暴行を働いた夜から一夜明け、空は青く澄んだ色を湛えているのとは対照的に、彼が「闇の者」へ堕したと「感じ取ってしまった」あやめの顔はひどく曇っております。

そんな彼女を見ながら、窓の外に立つ永倉は苦笑を浮かべ、その隣に立つ銀彌は、特にこれと言った感慨もないのかふうんと小さく呟くだけでございました。

「昨日の今日で宴会？　しかもアレだけ暴れた角屋で？　更には芸妓総揚げだど！？」

「まあ確かに、馬鹿げていると思われるも仕方ないとは、正直俺も思う」

「せやけど、芹沢はんの他に、局長の近藤はん、副長の土方はん、隊長の沖田はん、斉藤はん、それに外にいてはる永倉はんも行かはるんどすやる？　余程の事が無い限りは大事だいじ無いとは思います」

百花の言う「大事」とは、恐らく昨夜のように酔った芹沢が大暴れした拳句、芸妓達に乱暴を働く事を差しているのでございましょう。

確かにそれだけの者が集っていれば、如何に「闇の者」である芹沢とて、数の上で暴走を押さえ込まれる事でしょう。

しかし、先にも述べたように昨日の今日。「酒で大暴れした」と言う芹沢の醜聞は、既に島原のみならず京の街にも広がり、新撰組の評価もまた下がりかけているはず。

彼らとて、己の評判を下げるような事はしたくないはずなのに、また酒を飲ませると言う事は……

「今夜の飲みは、芹沢って奴に対する最後の晚餐かい、永倉のにー

さん」

「……ああ。山南さんと土方さんが、その手筈を整えている」

「いくら『闇の者』に堕してはる言つても、集団でかかれれば人間でも『闇の者』は屠れます」

低く呟いた永倉に、百花は静かに頷きを返すと、今度は真剣な表情であやめの顔を覗き込んだのでございました。

事務的な中に、不安を微かににじませた表情で。

「……新撰組の事は、島原の『外』の話や。お姉さん……宵闇太夫が出る事と違いますやろ？ それに何より、今夜は満月ではないから、お姉さんの本来の力は発揮できまへん。それでも行かはるんですか？」

「ああ。行かねばならんのだよ。……『宵闇』としての私ではなく、あやめ個人として」

真つ直ぐに百花の目を見つめ返し、返すあやめの顔に浮かぶのは後悔でしょうか。

眉を八の字に下げ、それでも無理に笑おうとしているのか、口の端は微かに上がっております。

芹沢が「闇の者」へと堕してしまつた事に……止められなかった事に責任を感じているのでしょうか。己の無力を痛感し、そして「殺す」と言う方法をとる以外に出来ぬ現実を嘆いているのです。

「……彼はまだ、完全に暴走していない。永倉君には申し訳ないが、今宵、彼の者を殺させてもらう。……新撰組筆頭局長の襲撃など、君達にとつては醜聞甚だしいだろうが」

「それは、最初から土方さん達の筋書きでもある。確かに醜聞だが、これ以上あの人に騒ぎを起こされるよりはマシだつて事らしい」

そう言う永倉の声には、どこか自嘲めいた色が浮かんでおり、空を見つめる顔もあやめ同様曇っているように見受けられます。

彼が何を思っているのかは、あやめ達には分かりません。

数回会つただけのあやめでも、ひどく無念さを感じていると言うのです。それよりも付き合いの長い永倉であれば、なおの事様々な

思いが去来している事でしよう。

「……だけどさ、あやめちゃん。もしも君が芹沢さんを襲撃して……土方さん達と鉢合わせしたら、間違いなく口封じに襲われるぞ？」

「その口ぶりからすると、君は襲撃には関わらないのだな」

「……ああ。外されたよ。ちよつと、納得できていないのがばれてたみたいだ」

「そうか」

永倉の言葉に短く答え、あやめはすつくと立ち上がり……

「……銀、出るぞ。今回の攻撃、貴様だけが頼りだ」

「了解でさあ、お嬢」

「……どうか、気をつけておくれやす」

くるりと踵を返して言ったあやめの背に、何を見たのか。永倉と百花はどこか哀しそうな表情で溜息を吐き出しながら、部屋を出て行く彼女の小さな背中を見送ったのでございました。

居待月いまちつきが照らす闇の中。

新撰組屯所である八木邸にて、芹沢鴨は布団の中から月を見上げておりました。

新見が亡くなって以降、己の内で燦る「怒り」は、日に日に彼の理性を食い荒らし、気がつけば周囲が傷だらけになっている事が多くあります。

昨日など、呼んだ芸妓だけでなく同行した永倉、そしてこの間出逢った禿のあやめをも傷つけてしまっていたのです。

一体何が原因でそんな事になったのか。気持ちよく酒を呑んでいた事は覚えているのですが、ある瞬間を境に記憶はふつりと途切れておりました。

——俺は、どうしたと言うのだ——

日頃から持ち歩いている鉄扇に手を伸ばし、パチンパチンと開いては閉じ、閉じては開くを繰り返します。

確かに酒乱の気はございましたし、他人よりも腹を立てやすい性格なのも自覚しております。

しかし、記憶を失う程怒り狂うなど今までになかった事。それが、芹沢に得体の知れない恐怖を与えていたのでございます。

それに……眠ってしまったら、またしても新見の夢を見そうで怖いと言うのも。

——何故俺が、死者に怯えねばならんのだ——

心の中ではそう思いつつも、目を閉じればまた首から血を流す男の幻覚が見えるような気がして。芹沢はただただ月を見上げるだけでございました。

彼の耳に届くのは、隣で眠る女の寝息と、全てを洗い流すかのように降りしきる激しい雨音、そして己が鳴らす鉄扇の金属音。

それらが月の光に照らされ、薄く光る様は現実とは思えぬ程の優美さで……

しかしその瞬間。芹沢はたと気付くのです。

……月と豪雨が同居する事など、まずありえないと。

それに気付いた瞬間、ぞくりと彼の背に冷たい物が走り、その大きな体を強張らせたのです。ぞくぞくと這い上がる、寒気に似た怖気。

隣で眠っていたはずの女の姿は、いつの間にか首から血を流す男の姿に変わっており、くつくつと嫌な笑い声を上げているのです。「昨日は危なかったですねえ、先生？ 子供を殺しかけるなんて」「それ」の存在を認めたくないのか、芹沢は小さく息を呑むと、半ば武士としての本能だったのか、布団を跳ね除け枕元に置いていた自分の刀をとり、それを即座に抜き放ちます。

死んだはずの存在が目の前にいる以上、これは夢でございましたよ。月の光を受けて、金色の系の様な豪雨も、夢だからこそその光景のはず。ですが、刀の感触や血の臭いは夢とは思えぬ程しっかりしており、芹沢の頭を混乱させるのです。

そんな彼の混乱に気付いているのか、「それ」は真っ直ぐに手を

伸ばすと、芹沢の頬に手を添え……そして、囁くのでございます。

「逃がしませんよ。あなたは私の……玩具なのですから」

「だ、黙れっ！」

「それ」が与えてくる、底知れぬ恐怖を振り払うかのように、芹沢は虚勢混じりに怒鳴りつけると、抜いた刀を相手の裂けた喉めがけて振りぬいたのでございます。

……刹那。

ざくり、と嫌な音と感触が、刀を通して芹沢の手に伝わり。直後、何やら生温い物が彼の顔に勢い良く降りかかったかと思うと、目の前の存在が……そして景色が、すうっと切り替わったのです。

天に輝いていたはずの居待月とその光は消えて周囲を灰色に染め、芹沢の刀を受けているのは先程まで寝ていたはずの女。それが驚いたように目を見開いたまま、芹沢に己の血を吹きつけながら息絶えておりました。

一瞬、何が起きたのか理解できず、芹沢は刀と女を交互に見やり……そしてようやく「自分が女を手にかけたのだ」と気付いた時、彼の耳元で声が聞こえたような気がしたのです。

……もう、闇に堕ちるしかないのですよ、と。

そしてそれを聞いた瞬間。「芹沢鴨」と言う一個人の自我は……完全に崩壊したのでございます。

「グウ、ヲオオオオッ！」

黒衣に身を包んだあやめと、同じく黒衣に身を包んだ銀彌が、新撰組屯所である八木邸に侵入した時。真っ先に耳に入ったのは、何者かの咆哮でございました。

そして直後、彼女達の近くの部屋の障子が勢い良く吹き飛び、そこから何者かの血に塗れた芹沢鴨が姿を見せたのでした。

しかしその瞳の色は灰色に染まり、その目に映る物全てを端から持っている鉄扇で粉々に破壊していくのです。

「お嬢、あれって……」

「破壊魔^{ガイゴイル}……既に自我をも壊した後、と言ったところだな」

「どうする？ 今宵は満月じゃねえから、『変身』も出来ねえし刀も出せねえ。お嬢的に、ちよいとばかし『ぴんち』って奴じゃねえか？」

「だから貴様を連れてきたんだろう。何の為の獵犬だ」

「オレは獵犬じゃなくて、お嬢の番犬だろ！？」

「どちらでも大差無い」

言いながら、彼女達は部屋の外に出ようとする芹沢の……「破壊魔」の前に躍り出ると、それ以上進むのを阻むかのように足を払って相手を仰向けに転ばせたのでございます。

「グウ……グヲヲオオッ！」

しかし、「闇の者」と化しているだけでなく、生来の身体能力も高いのでしょう。「破壊魔」はすぐさまその身を起こすと、視界に入った者……銀彌めがけて、闇に染まった鉄扇を振り下ろすのです。ですが、一方の銀彌もそれを僅か半身ずらす事でかわすと、懷から手甲状の武器……「虎の爪^{バグナグ}」と呼ばれるそれを取り出し、即座に己の手に嵌めるのでした。

「へへっ。『破壊魔』とやり合うのは初めてだぜ」

「相手は頑健さが売りの『闇の者』だ。せいぜいその爪を壊されんよう気をつけろ」

「了解！ ま、いざとなったら喉笛食いちぎってやりませあ」

ニイ、と口角を吊り上げて言いながら、銀彌は勢い良く床を蹴ると「破壊魔」の懷に飛び込んで相手の腕をその「爪」で引き裂きにかかります。

が、相手はそれを後ろに飛んでかわすと、低く唸りながら左拳を振り上げ、銀彌の顔面めがけて振り下ろします。

ですが銀彌もまた、その一撃を身を擦ってかわすのです。標的を失った拳は銀彌の脇ギリギリを掠めると、そのままの勢いで畳にめり込み、その下にある床板までみしりと悲鳴を上げさせるのでござ

いました。

まさに一進一退の攻防。互いに間髪入れずに攻撃を繰り返しながらも、相手の攻撃は一切受けておりません。ただひたすらに、周囲の壊れる音が響くだけでございます。

その音を聞きつけたからなのか、それとも他の「用事」が済んだからなのか。廊下を駆ける複数の足音が響いたかと思うと、直後にはあやめの見知った4人の男が、明らかな殺意を身に纏い得物を抜いた状態で姿を見せたのでございます。

「鴨さん、覚悟……って、え!？」

「がむしんが鼻肩にしてるトコの嬢ちゃんと男衆!？ 何だってこんな所に居やがる!？」

「君達と同じだよ、沖田君、原田君。私は芹沢鴨を……そこに立つ『闇の者』を、殺しに来た」

まさかここにあやめと銀彌がいるとは思っていなかったのか。現れた4人……沖田、原田、土方、山南達は、眼前で繰り広げられている光景に驚いたように目を開くのでした。

そしてそんな彼らに、あやめは淡々と言葉を返し……そして、じつと芹沢を見つめて言葉を続けるのでございます。

「……銀、『破壊魔』に堕し易い『感情』は何だったかな？」

「んあ? 『憤怒^{ふんぬ}』だろ? お嬢、流石にそれくらいはオレでも知ってるぜ?」

「そう、『憤怒』。『自身に対する怒り』が許容を越え、ヒトと言う器で支えきれなくなった際に、人は『破壊魔』と化す」

壊れる音の合間に、「破壊魔」の鉄扇と銀彌の「爪」がぶつかり合う音が響く中、あやめは自身の持つ、ごく普通の舞扇を取り出しながら、独り言のように言葉を続けます。

「己に対する怒りのやり場に困って八つ当たりに他者をいたぶり、その事に対してまた自身へ怒る。負の連鎖だな。だからこそ厄介なのだよ、『破壊魔』と言う存在は」

扇の鮮やかな赤が、彼女の纏う黒と空気を染める灰色の中で映え、

その動きに合わせるように紡がれた言葉は唄の様な抑揚がついて。まるで舞っているかのように見えた彼女の仕草に、思わず原田と沖田の口からは感嘆の溜息が漏れるのです。

その一方で、山南と土方はと申しますと、あやめ同様真っ直ぐに芹沢に視線を、そして己の刀の切っ先を向け、凜とした声で言い放つのでございます。

「それでも、やらなければならないのです。芹沢さんには申し訳ないですが」

「狂っちゃった事を同情する気はねえ。この人は、いずれ新撰組を駄目にする」

土方が言つと同時に、やってきた4人は「破壊魔」を……いえ、芹沢をぐるりと囲むと、まずは原田の槍が彼の右腿に深く突き立ちます。

「グッ!？」

恐らく予想していない場所からの攻撃だったのでしょう。低く唸ると、芹沢はその灰色の目を銀彌から原田へと向けなおし……その隙を突くように、今度は山南が左肩を、沖田が右肩を続けざまに薙ぎ、それに乗じた銀彌が、ダメ押しと言わんばかりに「爪」でその胸板を大きく引き裂いたのでございます。

芹沢の体からは鮮血が飛び散り、部屋を、そして相対する者達の肌を汚します。ですが、彼は痛みを感じていないのか、気にせず鉄扇と拳を振り回して、見える物を粉々に破壊していくのです。

「壊れる……壊れ、ろ……全て、壊れるおおっ！」

「ふざける芹沢ア！ 壊れんのはテメエ1人で充分だ！ 新撰組を巻き込むんじゃねえよっ！」

芹沢の怒声に更に大きな声を返すと、土方は芹沢の懷に飛び込んで刀を構え……ですが、その刀が芹沢の体に届くよりも先に、芹沢が渾身の力を込めて投げた鉄扇が彼の額を直撃したのでございます。その強烈な衝撃に、土方の意識は一瞬飛び、その間に芹沢は彼との距離を詰め、その脳天めがけて両の手で作った拳を振り下ろした

のです。

「しまつ……」

「歳三さん！」

振り下ろされる速度は早く、かわしきれないと悟った瞬間。

土方への攻撃を完遂させる前に、ゴツと言う鈍い音と共に芹沢の体が床に沈んだのでございます。

――何が、起きた？――

いきなり床に突っ伏した形になった芹沢の体を呆然と見やり、やがて土方は芹沢から生えるようにして立つ影へそろそろと視線を向けるのでございました。

大雨ゆえによく見えませんが、芹沢の上に乗っているのは小さな影。黒い衣を身に纏い、手元では赤い舞扇をひらひらと振っているそれは、ぎゅむ、と芹沢の背を踏みつけながらも1歩前に進み……
「君、相手が『闇の者』である事を失念していないか？」

その声に、そして闇に慣れた目に。嘆息混じりに言った影の正体があやめであると気付くと、土方は軽く眉を顰めて彼女を睨みつけ、怒鳴るように問いを放つのです。

「ガキ……お前、いつの間に！？ 何で芹沢さんの上に乗ってやがる！？」

「人間は、自分の目線より上には意識が行きにくいのだ。……かくれんぼの極意だよ」

言いながら、彼女は暴れる芹沢からひょいと飛び降り、振り上げられた拳を舞扇で受け止めたのです。

ひどく哀しげな表情で。

「芹沢君。君はもう、私が何者であるかも忘れたか？」

「うおおお……あ……？」

「私を忘れるのは構わん。だが……ここにいる皆の事も、忘れてしまったか？」

あやめの姿を、そして自身を取り囲む土方達を認識したのでしょうか。微かに舞扇にかかる拳の力が緩んだように思えたのです。し

かしそれも一瞬の事。すぐにあやめの扇はミシミシと小さな悲鳴を上げ始め、それを支えるあやめの腕もふるふると震えるのでございます。

これ以上は支えきれないと判断したのでしよう。彼女はギシリと悔しげに奥歯を噛み締めると、大きく後ろへ飛んで、芹沢の拳から逃れ、言葉を続けるのです。

「君は何を破壊したかった？ 島原か？ 呉服屋か？ 長州藩士か？ 新撰組か？ 荒れる世か？ …………… それとも、自分自身か？」

逃げた彼女を追うように、芹沢はおうおうと吠え、問いには決して答えません。

答えの代わりに腕を振るい、周囲を、そして自分の体すらも破壊するように暴れるだけ。彼の拳が何かにぶつかる度に、山南達に斬りつけられた傷からは血が噴出し、周囲を染めるのです。

「もう、本当に自我を闇に喰われてしまったのだな」

伏目がちに落とした呟きは、雨に消されて誰の耳にも届かずに。

彼女は意を決したように顔を上げると、襲い掛かる芹沢を軽くいなし……

「人から堕した闇の者よ。貴様の止まった時間は、死を以って再び動かすと良い」

冷たさすら感じる目を「破壊魔」に向けて言い放つと、己の髪に挿していた簪をするりと抜き放ち……そしてトン、と軽い足音と共にその懷に飛び込むと同時に、先の簪を相手の胸……心の臓にあたる部分に、深々と付き立てたのでございます。

常人ならばその一突きで即座に絶命していた事でしょう。しかしあやめの前に立つのは「闇の者」へと堕したせいなのか、胸からは血飛沫を吹きながらも、苦しげな呻き声を上げ、己の内から沸く破壊衝動の命ずるまま、遮二無二暴れるのです。

それでも、やはり刺された部位が部位だけに、「死」は近いのでしょうか。彼の体は、徐々にではありますが闇に溶け始めております。

そんな彼に、何を感じたのか。土方は「芹沢」の前に立ち……そして、刀を構えて、静かに口を開いたのです。

「こんな奴でも、新撰組の筆頭局長だ。……身内の不始末は、身内がつける」

ちゃき、と刀が鳴り、その切っ先は先程あやめが簪を刺した所に固定され。

「芹沢鴨。局中法度に背いたとして処分する。其処もとの罪状は……土道、不覚悟」

そして、その言葉を言い終わるとほぼ同時に、土方の刀は、彼の胸に吸い込まれるようにして突き刺さり……「破壊魔」芹沢鴨の体は、ざらりと音を立てて、決壊したのでございました。

最期に、何故か笑んでいたように見えたのは、闇の見せた幻だったのか。既に影も形も無くなってしまった以上、それを確認する術はございませんが。

——それでも、最期くらいは笑って欲しいと願うのは……私の我儘かな——

軽く目を伏せ、そしてこの場から去ろうと踵を返した瞬間。

彼女の首筋に、冷たい刃が当てられたのでございます。それが、山南の持つ刃であると気付くと同時に、昼間心配そうに言っていた永倉の言葉を思い出したのです。

「土方達と鉢合わせしたら、間違はなく口封じに襲われる」と言う言葉を

「禿さん。貴女には申し訳ないのですが、ここで死んで頂かなくてはなりません」

——ふむ、永倉君の懸念は間違っていないかったな——

山南の言葉に、あやめは……そして沖田と原田に切っ先を向けられている銀彌も、全く気に留めた様子を見せません。それどころか呆れたような溜息を1つ吐き出すと、あやめはくると山南達の方へ振り返り……

「……………要はこの場に『私と銀はいなかった』と言う事にすれば

良いのだろう？ 簡単な事だ」

「おい、まさか『見なかった事にする』とか言うんじゃないだろうな？ そいつは無理な相談だ。島原の女は信用できねえ」

「案ずるな土方君、『見なかった事にする』のは私達の方では無い。君達が、私達の存在を忘れるのだよ。これからそう書き換えるからね」

ニヤリと、どこか悪人めいた笑みを浮かべるとあやめは掌を彼らの方へ向け……次の瞬間、雷に似た眩い光が、彼らの網膜を灼いたのでございます。

そして次に目を開けた時には、いつもよりも荒れた部屋が広がっております。

……先程の光が、あやめの「記憶改竄」によるものと言う事も、そしてあやめと銀彌がいたと言う事実も忘れて……

文久3年文月、18日の深夜。

芹沢鴨をはじめとする芹沢派と呼ばれる一派は、その夜「長州の不逞浪士に暗殺された」のでございました。

*

京の街、どこぞの茶屋の中。2人の男が、並んで団子を頬張っております。

「おい、芹沢鴨が殺されたって？ そう簡単にくたばるように見えなかったけどねえ」

「ええ。表向きは尊攘派の不逞者に暗殺されたと言う話にしています」

やたらと訛りの強い男の言葉に、もう一方の男はずれた眼鏡を押し上げ、口元に笑みを湛えて言葉を返します。

「ですが実際は、会津からの指令による内部粛清です。ただし、少

々異質な事も起こりましたが」

「内部肅清か。怖い組織やか、新撰組ゆ言うのは。人斬り集団とゆ言
噂はま本出でいつことにかあらんな」

「お褒めの言葉と受け取っておきます。ですが、あなたもお気をつ
けなさい。何が起るかわかりません」

「ご忠告、みどうもように。やけど彼らあいとらじゃー俺は捕まえられんさ」

からからと笑いながら、訛りの強い男は眼鏡の男にそう言葉を返
すと、ちらりと店の外に目を向けます。

そこには、「芹沢を殺した浪人」を探す浅葱色の羽織を纏う男達
が鋭い目付きで歩いているのが見えるのです。

「ありやあ真実を知らん平隊士平隊士かなかえ？ 存在存在しないしやーせん犯人を捜す捜す
らあて、ご苦労な事よ」

「暗殺の真相を知っているのはごく一部ですからね」

「おん君しもその『ごく一部』やたろお？ 恐ろしい男男だよちや」

口では恐ろしいと言いながらも、訛りの強い男は然程怖がつてい
る様子もなく、にこやかな笑みを浮かべている相手の顔を見つめま
す。

しかしやがてそれも飽きたのか、訛りの強い男は唐突に真剣な表
情を浮かべ……

「やけど、気になるぜよ。おん君しの言ゆう、『ち少々つくと異質な事』と
言ゆうのが」

「そうですか？」

「ああ。おん君し程異質な人はいないと思っぜよ。そのおん君しが『異
質』と言ゆうらあてのお」

そう言うと同時に、訛りの強い男の姿はまるで煙の如く掻き消え
てしまったのでございます。

ですが眼鏡の男は特に驚いた様子も見せず、むしろ呆れたような
溜息を1つ吐き出し……そして彼もまた、その場から煙の如く掻き
消えたのでございました。

その6：文久3年、霜月

文久3年、深深と冷え込む霜月の中頃。

夏は暑く冬は冷え込むこの京の街では、どの家も火鉢を取り出して暖を取り、水仕事の度にその水の冷たさに顔を顰めておりました。そしてここ、島原の一画「縁屋」近くにございます百花が営む置屋でも、その寒さは水仕事をこなす「仕込み」と呼ばれる修行中の者や、「見習い」や「半だらし」と呼ばれる舞妓見習いの者達を苛んでおりました。

主な被害は、彼女達の手指に生まれる皸。^{あかざれ}水仕事によって脂が落ちた手は、冬の乾燥した空気によって小さな皰^{ひび}が生まれてピリピリと痛むのです。更に彼女達は、その手で舞や三味、琴などの稽古に出なければならぬのですから、慣れるまでは苦痛と言えましよう。事実、稽古から返ってきた彼女達の手は、毎日のように皰が開き、薄く血に染まっているのです。それは、文字通り「血の滲む努力」の証。それが彼女達の誇りであり、自信に繋がるのです。

そしてそんな日々は、違う意味であやめをも苛んでいたのです。います。

「くっ……美味そうな臭いを充満させおって……」

置屋の一室、水菊とあやめに当てられた部屋の中で、あやめは半ば八つ当たりのような言葉を、苛立たしげに放つのでございます。

それもそのはず、彼女は「吸血鬼」なる「架人」^{ひんしやく}。一日に一滴程度の血潮で生活できる身であるとは言え、彼女の命をつなぐ糧は、種の名の通り人の「血」なのです。この時期、仕込みや見習い達の指から滲む血の芳しい香りに、彼女の理性は崩壊寸前でございます。た。

「……我慢しねえで、容赦なく食いついたら良いじゃねえですか、お嬢。お嬢は少食すぎる」

「馬鹿を言っなこの駄犬。血を吸ったと言う記憶を消せるとは言え、

不必要に食いつくなど……『餓鬼^{グール}』と何ら変わらん」

水菊の着付けを手伝っている銀彌に、据わりきった目でそう返しながら、あやめはその脇で揚屋へ持つていく小物を用意しております。

「餓鬼」と申しますのは、「闇の者」の一種でございます。その名の通り常に飢えを感じ、その欲求の赴くままに喰い続ける異形。個体によってその食欲はまちまちですが、大抵はありとあらゆる物をひたすらに食し続ける、暴食の者でございます。

特に墮人の「餓鬼」は、その底なしの食欲を満たす事のみを目的とする為、時には人間をも喰らう、心底恐ろしい存在でございます。た。

——「餓鬼」か。……思い出したくもない事を思い出した——

かつて起こった出来事を思い出したのか、それでなくとも不機嫌そうな表情を更に顰め、あやめが珍しく大きな舌打ちを鳴らした瞬間。

部屋の襖が微かな音を立てて開き、そこから「お母さん」である百花が、どこか深刻そうな表情を覗かせたのでございます。

「お母さん？　どないしりましたんえ？」

滅多に娘達の部屋に上がる事のない百花の登場に驚いたのでしょう。きょとん、と水菊は目を見開いて問うのです。芸事に厳しい百花のこと、彼女の浮かべている、いつにもまして厳しい表情から何かとんでもない粗相をしでかしたのでは、と心の内で不安が過ぎったのかもしれませんが。

しかし、当の百花は素早く周囲を見回して誰もいない事を確認すると襖を閉め、吐き出す様に呟いたのでございます。

「……『餓鬼』が、現れたかもしれまへん」

先程軽く話題に上げた「闇の者」の名が、百花の口から吐き出された瞬間、ピクリとあやめの眉が跳ね上がりその顔を百花の方へ向けます。

「かも知れない」と言う事は、まだ決定的な証拠は無いのでござ

いましょう。しかし、百花の表情は言葉の曖昧さとは真逆の、確信めいた色が浮かんでおりました。

「何が、起きた？」

「壬生寺でお墓が荒らされて、お供えと、納めていたご遺体が無くなっていたと」

「……供え物はともかく、亡骸の方は土に返ったんじゃないの？」

「銀彌はんの言う事も考えたんですけど、そうと違いはるみたいえ。何しろ荒らされたんは新しいお墓やったらしいから」

真っ直ぐにあやめを見つめながら、しかしやはりどこか苦しげに呟く百花の言葉を、見つめられている方は、真剣な表情で反芻いたします。

墓を荒らすだけならば、共に埋葬された貴重品を頂こうとする不逞の輩、俗に言う墓荒らしの仕業とも考えられました。ですが、墓荒らしが奪うのは金品であって、ご遺体を奪うような事は、余程の事情がない限りはございません。

まして壬生寺は新撰組が稽古に利用している場所。斯様な場所で墓荒らしを行おうとするのは、余程自身の腕に覚えがあるのか、無謀のどちらかでございます。

……だからと言って、可能性が全くない訳ではありませんし、「餓鬼」であると言う証拠もございません。

「……他に、何かあるのか？」

「へえ。お墓の近くに、仏さんとは別人の亡骸が、食い散らかされたみたい置いてあったと」

それを聞いた瞬間、あやめは不快そうに顔を顰め……

「……二十数年前と同じ状況、か」

「……へえ。その通りどす」

吐き出す様に呟かれた言葉に、同じ様に百花も吐き出す様に返し……やがて百花は深い溜息を吐き出すと、その場でずっと土下座をするように頭を下げて、言うのでございました。

「お姉さん。もしもほんまに『餓鬼』やったら……残された者にと

つては、あまりにも酷な事どす」

「ああ、分っている。……出来る限り今宵中に片をつけるさ」

あやめの返事に何を感じたのでしょうか。百花は一瞬だけ床に向けた顔を、今にも泣きそうな「女」の物に変え……ですがすぐさま、いつもの厳しい「お母さん」の表情に戻して、ぽんぽんと手を叩いて言うのでございました。

「さあさあ水菊。逢状かかってますんえ？ 支度が終わったのなら、早う行かんと」
と。

「縁屋」へ向う道中。あやめを引き連れ、からこると下駄を鳴らす水菊がふと思い出したように声を漏らしました。

「お母さん、どないしはりましたんやる？ 何や、妙に辛そうだし、ただ……」

「お前にも思うところのある『闇の者』がいるように、モモ……百花は『餓鬼』に対して思うところがあるのだ」

返ってきた言葉に、水菊は驚いたようにあやめの方へ視線を下ろすと、彼女もこちらを見ていたのか、ばかりと目が合います。

淡々とした声とは対照的に、妙に暗い……先程見た百花と通じる所のある表情。そこから読み取れるのは怒りと悲しみ。

島原の女であれば、誰でも一度は浮かべた事があるであろう表情でございますが、あやめが浮かべるのは島原の女性が浮かべる「それ」とは、ほんの少し異なるような印象も受けました。

その「異なる部分」を読み取るうとする水菊に気付いているのか、彼女は視線を水菊から反らすと、冷静を装った声で語るのでございました。

「お前が島原に来るより以前、まだ百花が、この島原の芸妓だった頃の話だ。百花には身請けを約束した旦那がいた。珍しい事に、旦那は一途な男でな。島原の芸妓としては異例とも言える、正妻とし

ての身請け話だった。私も我が事のように喜んだ物だ」

島原に限らず、花街の女性が正妻として迎えられる事は滅多にございせん。良くても妾、愛人と言った関係。

それを嫌と言うほど理解している水菊にとつて、それはひどく羨ましいような、そして誇らしいような気が致します。

それ程、百花は愛されていたのだと。島原に来て以降、自身の面倒を見てくれた「お母さん」である百花が愛されたと言う事実は、己の事のように嬉しい物でございます。

……ですが。そこまで考えて、彼女ははたと気付いたのです。

身請けが決まっていたのならば、何故未だ花街に……この島原に、「お母さん」として残っているのかと。

そしてその答えは、あやめの口から齎されたのでございました。

「だが、百花が島原から離れる1週間前。……その旦那は、西本願寺の境内で、無惨な姿で見つかった。調べた結果、旦那は『餓鬼』に食い殺されたのだとわかった」

「闇の者」をおびき寄せる為の「囹」としてあやめに協力する事の多い水菊でございますが、実は未だ「餓鬼」は目にした事はありません。

堕人の「餓鬼」は悪食の化身である。斯様な話を、以前水菊は聞いた事がございます。聞いてはおりましたが、まさか人すらも「餓鬼」の食事の対象だとは思わなかった為か、ぞつと彼女の背に悪寒が走るのですた。

無論、ある意味においてはあやめなどの「吸血鬼」も「人を喰う異形」と言えましょう。ですが、「肉を食われる」と「血を吸われる」のとは、受ける印象が全く異なります。残る見目や、水菊の慣れの問題でもあるのでしょうか……

「食い殺した『餓鬼』は、その3日後に倒した。だが……倒した所で、百花の旦那が帰ってくる事はない。だからあいつは、誰よりも『餓鬼』を憎んでいる」

「最愛の存在を奪ったから、どすか？」

「そうだ。……………そしてそれと同じくらい、百花は私の事も憎んでいる」

「どうして？」

「『どうしてもっと早く解決してくれなかったのか』とな」

言いながら、あやめはどこか寂しそうな目で、遠目に見える「縁屋」を見つめます。

実際にその時、百花にそう言われたのかも知れません。

何故、もっと早くに見つけてくれなかったのか、何故もっと早くに倒してくれなかったのかと。

愛した男を失ったが故に、そのように詰る^{なじ}百花の気持ちも分りま
すし、それを永遠に引き摺るあやめの性格も理解しているつもりで
す。

ですが、今の百花がそう思っているなどとは、水菊には到底思え
ないのでございます。

本当に百花があやめを恨んでいるのなら、あんな哀しそうな目で
あやめを見つめたりはしないはず。いかに元芸妓であり、己の本心
を隠す事に長けているとは言え、憎悪や哀しみと言う激しい感情ま
では、簡単に隠し果せるものではございません。

仮にあやめには気付けぬように上手く隠していたのだとしても、
同じように感情を隠すことに長けた芸妓である水菊にまでは通じぬ
はず。何しろその手練手管は、当の百花仕込みなのですから。

だからこそ、違うと。水菊には、確信がございました。

ですが自身が……………そして仮に百花が「違う」と否定した所で、あ
やめは聞き入れない事であろう事も、彼女は確信しておりました。
あやめの、妙な所で頑固な性格もまた、水菊は知っているのですか
ら。

「今回はその時とひどく似通った状況なのだ。モモがあんな顔をす
るのは当然と言える」

「……………確かに、お母さんが辛そうな顔をする理由は、そうかも知れ
まへんなあ……………」

「と、言う訳で。私はこれから壬生寺へ行つて少し調べてくる。座敷には向かえないが、逢状を出したのが永倉君なら、その辺の事情は察してくれるはずだ」

そう言つと、あやめはひらりと手を振りながら「縁屋」への道から外れ、目的地……壬生寺へ向つてその足を向けたのでございます。その行動に水菊は驚いたように目を開き、きよるきよると、芸妓らしからぬ落ち着きの無さで周囲を見回し、そして心配そうに眦を下げて問うのでございました。

「え？ お姉ちゃんお1人ですか？ 銀彌はんを連れていかれた方がよろしい思ふんどすけど」

「今回は寺だ。寺や墓にアレを連れて行つたところで、どうせ香や死臭にやられて使い物にならん」

「……………へえ。では、氣をつけておくれやす」

苦い笑みを浮かべて言うあやめに、水菊もどこか置いていかれる子供のような、寂しげな表情を見せ……………しかしすぐさま芸妓としての顔に戻ると、深々と頭を下げて、その小さな背中を見送るのでございました。

冬の寒空の下、この壬生寺に到着してからどれ程の時間が経つたでしょうか。

寒さに身を震わせながらも、あやめは暗くなつた境内で、ぼんやりと空を見上げているのでございました。浮かんでいるのは数多の星と、満月から1つ欠けた十六夜の月。

一通り境内と、その側にある墓を見回つた後、彼女が結論付けたのはやはり「餓鬼」による仕業であると言う物。

それと申しますのも、この寺全体に漂う不穏な空氣が、墮人と化した「闇の者」特有の氣配であること、そして何より、荒らされた墓に捨てられたらしい亡骸に残る齒型が、人の物であつたが故。

変身の出来る満月を過ぎている為、いつもならそこで「番犬」で

ある銀彌を呼ぶところでございましたが、来る前に水菊へ告げたように「使い物にならない」と判断している事、そして呼ぶだけの時間も惜しいのもあり、彼女は1人でじつとその場に佇んでいるのでございました。

浮かぶ星々を線でつなぎ、あれは小熊に見える、あれは龍に見えるなどと遊んでいる姿は、端から見れば時間を忘れてはしゃぐ子供のように見える事でございましょう。

実際には、いつ何時、何者が来ても良いように身構えているのですが。

そうして更にしばらくして。あやめの背後から、玉砂利を踏む足音が1つ、寄つて来るのが聞こえたのでございます。

ですが、その気配が放っているのは……警戒と不審、そして心配の入り混じった物。「餓鬼」特有の「飢え」でないと理解すると、あやめはその足音の主へと振り返つて相手の姿を確認するのでございました。

そこに立つのは、月の光の中でも映える浅葱色の隊服。刀を通常とは逆の右に差したその人物は、不可思議だと言いたげにその首を傾げてあやめを見つめておりました。

「そこで何をしている。その格好……花街の禿であろう?」

「お侍はんこそ、何をしてはるんどす?」

「俺は巡視だ。壬生寺は屯所に近い事もあるが、それ以上に最近この寺で奇妙な事が起こっている。故に帰れ、島原の娘。お前が事を起こしているとは思えぬが、巻き込まれぬとも限らん」

硬い物言いとは裏腹な、心配そうな声に思わず顔を緩めたのも束の間、あやめは何かに気付いたのか、すぐにその顔を揚屋などで見せる「作った笑み」に変えると、その青年の袖を引いて、言葉を紡ぐのでございます。

「お侍はん。うちは『餓鬼』を探しておりますんえ」

「『餓鬼』? 子供が子供を斯様に呼ぶ事は甚だ遺憾だな」

「ああ、子供の事の『ガキ』やあらしまへんえ? 『餓えた鬼』て

書く、ほんまの『餓鬼』どす」

「何？」

「お腹が空いた、何か食べたい、何でも食べたい、美味しいもの何でもかんでもみいんな食べたい……そう言う思いを抱いた、物の怪を捜してましたんえ」

にこ、と笑う彼女に毒気を抜かれたのか、それともあまりにも突拍子のない言葉に啞然としただけなのか。青年はきよとした表情で彼女の顔を見やるのでございました。

一方であやめの方は、作り笑いを浮かべたままコロコロと下駄を鳴らして側に歩み寄ると、その新撰組隊士の裾をきゅっと掴み、小首を傾げて問うのです。

「……お侍はんは、新撰組のお方どすなあ」

「見ての通りだ。名は、斉藤一と言つ」

「ほな斉藤はん。……突き飛ばすけど堪忍しておくれやす」

そう言つたのと、突き飛ばしたのはほぼ同時。予期せぬ出来事に斉藤と名乗った青年の体はぐらりと傾ぎ、たたらを踏んで数歩分後ろへと下がります。

同時に彼の目に飛び込んだのは、地味な色合いの袈裟を纏った僧侶と、それが伸ばした手からひよいと逃れるあやめの姿でございました。

その様は、まるで絵巻物に描かれた、牛若丸と弁慶の、五条大橋の戦い的一幕のよう。

異なるのは僧侶の目に宿る狂気と、その身に纏う邪悪な気配。

「お坊はんが堕人と化すなんて、世も末どすなあ」

「何だ？ この寺の坊主？ だがしかし……この異様な気配は一体……！？」

傾いだ体を立て直すと、斉藤は己の刀に手を置き、いつでも抜けるような体勢をとって現れた僧侶に鋭い眼差しを送るのでございます。並の者ならば、その眼光の鋭さに竦み、退くのですが……僧侶は逆に楽しそうに口の端を歪めると、妙に紅く染まった舌で唇を舐め

て言葉を放つのです。

「美味そうだなア、お前らア」

そしてその言葉と同時に、僧侶はその口を大きく開き、あやめめにかけて突進したのでございます。

口から覗く歯はどれもこれも鋭く尖っており、月明かりの中で見える瞳に浮かぶのは「狂気」と「餓え」。

真っ直ぐあやめに向かう相手に、不穏な物を感じた斉藤は、チイと1つ舌打ちを鳴らすと彼女と僧侶の間に入り、反射的に「斬り殺す一撃」の居合いを放ちます。

ですが……相手はその刀を歯で止め、そしてぶつと吐き出すのでした。

「何だ、今のは……歯だけで、俺の刀を止められたと……」

「金物は不味いなア。食うならやっぱリイ……肉が良いいいイ」

ニタリと笑いながら、相手は袈裟の懷から何かを取り出すと、まるで口直しと言わんばかりにそれに向って齧りつくのです。

歯を立てた瞬間、それからはブチュリと気分が悪くなるような音が響き、同時に鉄臭さと生臭さの入り混じった、奇妙な臭いが斉藤とあやめの鼻に届いたのです。

そして相手の齧りについている「それ」が、人の腕だと気付くのに、そう時間はかからず……2人は軽く顔を顰めると、半ば睨みつけるような目で、その僧侶を見据えるのでございました。

「娘、今すぐ屯所へ向かい、局長か副長に保護してもらえ。此奴は俺がどうにかする」

「……君1人でどうにかなる相手なら良いが、残念な事に今回はそうとも言えない。アレは、真正正銘の『餓鬼』だ」

再び刀を構え直した斉藤の言葉に、あやめは軽く首を横に振りながら素の口調でそう返すと、ずっとその目を憎々しげに細めるのでございました。

鉄錆の臭いがすると言う事は、相手の齧っている腕から血が垂れていると言う事。そしてその腕は、「持ち主」から離されてそう時

間が経っていないと言う事なのですから。

「満たされないんだよ、何を食ってもオ。毎日毎日豆腐と野菜と雑穀だけエ。そんな物でエ、満たされるはず無いだろオ？」

「新撰組も、然程食生活豊かとは言えぬから腹が満たされぬと言うのは理解出来る。だが、だからと言って斯様な暴挙に出る心境までは理解出来ぬし、したいとも思わぬ」

「島原の女も同じだ。むしろ貴様らより余程餓えているだろうな。何しろ揚屋での飲食はご法度。目の前にどれ程の馳走が並ぼうとも、それに手をつけられない苦しみは僧侶の比では無い」

食事を満足に出来るなど、公家の者が大名級の武士くらいしか出来ぬ世でございます。黒船が来てからはなおの事。

元は浪士の集りである新撰組も、そして厳しい掟のある島原の女も、いつも満腹を感じる程の食事でありつけるとは限らないのです。それを理解せず、ただ己の食欲を満たす事だけを考えた者。それが目の前の僧侶の格好をした「餓鬼」でございましょう。2人の皮肉めいた言葉に反応する事も無く、彼はただ口の端からだらりと獲物の血が混じった薄紅色の涎を流して言葉を続けるのでございました。

「……その点、肉は美味しいよなア。食っている間は満たされるウ。新鮮な肉なら、特にイ。……死体はもう、食い飽きたア」

そう言つて、持っていた「腕」を放り捨てると、彼は狂気で爛々と輝く目をあやめに向け……

「子供の肉はア、柔らかくて美味いんだよなあああア!!」

怒鳴るように言うと同時に、その尖った歯を剥いて、突進してきたのでございます。

そんな相手に、斉藤は真剣な表情で刀を構え、そしてその足元であやめはフンと鼻で笑い……

「私を喰らうと？ 生憎、私の血肉は安くはない」

その言葉と同時に、彼女の周囲にふわりと闇が広がったのでございます。

霜月の寒空の中、闇はその冷たい空気を遮断するような心地良い温かさを斉藤にもたらしたかと思うと、まるで意思ある物のように彼の刀へゆるりと纏わり付いたのでございました。

闇に纏わり付かれた彼の刀身は濡羽色に染まり、次の瞬間には襲い来る相手の左足を断ち切っていたのでございます。

「ギャツ!？」

「な、何だ!? 何故いつもよりも刀が軽い？」
なにゆえ

「今宵は十六夜。変身は出来ないが、刀に闇を纏わせる事くらいは可能だ」

彼女の言葉に同意する様に、斉藤の刀に宿りきらなかった闇は彼らの足元でゆらりと揺らめいて、切り落とされた「餓鬼」の足を己の内へ取り込み、同化したのでございます。

それはさながら、「餓鬼」の食欲が伝染したようにも見え、足を「喰われた」相手は、先までの狂気じみた笑みを消し、わなわなと肩を震わせながら、斉藤とあやめを交互に睨むのでした。

「そんな馬鹿なア! この体に……『堕人』になったなら、並大抵の刀は効かなくなっただってエ! そう聞いていたのにイ!? 何で斬られたんだよオ!？」

「『並大抵の刀』ならばな。だが、闇を纏わせた物であれば、闇の者を葬れる」

「どついう事だ、娘? 俺にもわかるよう、簡潔に説明をしろ」

「ふむ。ならば本当に簡潔に言おう。『毒を以って毒を制す』と言う言葉があるだろう。同じ事だ。闇を以って闇を制したと言う訳だよ、斉藤君」

するりとあやめが自身のこめかみ辺りに挿していた簪……前挿しと呼ばれるそれを抜きながらそう言つと、足元で蟠る闇の一部が、するりとその前挿しの本体部分を覆って黒金色へとそれを染め上げます。

闇を纏った前挿しは、先程よりも一回り長く、そして本来髪に挿すはずの部分が鋭利な針のように変化しておりました。

「闇の質が高ければ高い程、相手の闇を吸収し斬り裂く事が出来る。闇は得物の使い手を補助するから、刀が軽く感じたのはその為だろう」

斉藤に言いながらも、彼女の目は真つ直ぐに「餓鬼」に固定されており、足を失った「餓鬼」は堕してから初めて飢餓以外の感情……恐怖を感じ、自身に向けて腕を伸ばす、あやめから逃れるように、必死の形相で後退りをするのでございます。

斬られた足からは血ではなく漆黒の闇が流れ出し、そして流れたそれは追いつがるあやめの闇に吞まれ、消えていく様を見ながら。

「ひ、ひいイツ！ 嫌だ、嫌だあア！ 喰うのは良いけどオ、喰われるのは嫌だア！！」

「貴様が今まで喰った人間も、そう思いながら……そう口にしながら逝ったのだろう？」

視線に温度があるのなら、霜月の寒さなど生温くさえ感じられるであろう冷え冷えとした目を「餓鬼」に向けると、あやめはすっと鋭く尖った前挿しの先を相手の胸元に軽く押し当て……そして、これまた冷たい声で言い放ったのでございます。

「人から堕した闇の者よ。貴様の止まった時間は、死を以って再び動かすと良い」

そしてその言葉を斉藤が知覚した次の瞬間。

僧侶の姿をした「餓鬼」は、心の臓を前挿しに貫かれ、そのままあやめの纏う闇に飲み込まれていたのでございました。

あまりにも現実離れた出来事に少々呆気にとられつつも、目の前で起きた事を受け入れようとしているのでございましょうか。己の刀を染めていた「黒」があやめの足元へ退いて行くのを見つめながら、斉藤は不思議そうな表情であやめの顔を見つめるのでございます。

「娘、お前……何者なのだ？」

「何者、聞かれても。うちはただの禿どすえ？」

「それは認められぬ。先の振る舞い、そして気配は一介の禿の物で

はあるまい。死線を潜り抜けてきた侍のそれだ」

作った笑顔と禿の口調で返すあやめに、斉藤は軽く……しかし逃げる事は許さないと言わんばかりに彼女の腕を掴むと、首を横に振って真剣な表情で言い聞かせるのでございます。

「先の坊主と言い、お前と言い、纏う闇は只人のそれでは無い。京の治安の観点より、俺はお前を連れて屯所へ戻り、局長と副長、そして総長にこの事を報告し、どうするかを決めねばならぬ」

「それは困りますう。うち、面倒な事はごめんやわあ」
につこりと。

作り笑顔の中でも最上級の物を浮かべると、彼女は掴まれている方の手を斉藤の眼前にかざすと、次の瞬間には眩い光をそこから放ち……

「なっ！？ 娘！？」

「どうぞ、今宵の事は忘れておくれやす。あるいは夢やと思うてもらえたら嬉しいわあ」

そう言いながら、彼女は斉藤に「記憶を書き換える光」で「深夜巡拝に来ていたあやめを注意していた」と思い込ませ……すたこらさつさと壬生寺を後にしたのでございました。

ですが、島原へと逃げ帰る彼女の顔は、妙に陰しく……

——あの「餓鬼」……普通の刀が通じないと「聞いていた」とか言っただな——

「……嫌な予感がする……」

そう、小さく呟きを落とすのでございました。

*

「あれが^彼あいとの言う^{言っていた}ちよつたが『異質』か。成程、確かに^面しょうえい」

壬生寺から去っていくあやめの姿を、訛りの強い男が、少し離れた雑木林の中から見つめて呟いておりました。

口元には心底樂しげな笑みを浮かべ、その目は興味深そうにあやめの後姿を見送ると、その男は堪えきれなかったのか、ククツと喉の奥で笑い声を上げるのでした。

先日は共にいたはずの「眼鏡の男」の姿は今は無く、そして、無
いからこそこの状況を楽しんでいる節がござい
ます。

「あいともしばらくは戻らんし……ちつくといとさんで遊お嬢さんぼうかえ
ニヤリ、と口の端を歪ませて。

男は誰にと言う訳でもなくそう言い放つと、そのまま雑木林の奥
へとその姿を消したのでございました。

その7：文久3年、師走

「こんな所で寝るな。通行の邪魔だ」

闇の中、呆れたような子供の声がその場にこだまします。その足元では、腹から血を流した青年が呻きを上げ、ゆっくりとその声の主の方へ顔を向けるのでございました。

肌寒く感じるのは、冬と言う季節のせいか、それとも自身の体から血が流れすぎたせいか。

細い月明かりに照らされ、悪寒に身を震わせる青年の表情には、いささかムツとしたような色が浮かんでおります。

——好きで倒れてる訳じゃねえ。見りゃ分るだろ、怪我してんだよ

声にする事は叶わぬながらも、青年の唇はその言葉を紡ぎ、自分を見下ろす子供へ向ってギロリと鋭い眼光を飛ばしております。

あまりにも細い月の光と、それすらも逆光になっているせいなのか、子供の表情は青年からは見えません。分るのは、髪に挿している飾りから、子供がこの島原で「禿」と呼ばれる立場の存在である事、そして青年の血に塗れた姿を見ても、然程驚いた様子がない事くらいでございましょうか。

それどころか、彼女はその小さな足で倒れている青年の背を軽く踏みつけると、再度呆れたような声で言葉を紡いだのでございます。「呻くという事は、聞こえているな。もう1度言っ、通行の邪魔だ、退け」

——動けねえつつつてんだろーが。もう放っておけよ。つか踏むなこのクソガキ、余計に動けねえだろうがよ——

やはり唇はその様に動きはするものの、吐き出そうとした息は声にはならず、ただの意味の無い音として消えていくのでございます。一方で子供はその唇の動きを読み取ったのでしょうか。彼にかけていた足を下ろすと、すつとその脇に屈みこんで、淡々とした口調

で言うのでした。

「……腸が飛び出している。放っておけば間違いなく死ぬぞ」

——うるせえ。オレの生命力と回復力……なめんな、クソガキ——
「なめてなどいない。真実を述べているだけだ。……それとも貴様、死にたいのか？　ならばせめてここ以外の場所で死んでくれ。邪魔だし後の始末が面倒だ」

心の底からそう思っているのでしょうか。淡々と述べられた言葉は、この師走の空気よりもなお冷たく、青年の鼓膜に突き立つのでございました。

その言葉に何を思ったのか。青年はぶるりと体を震わせると、ギリと少女を睨み付け、そして無理矢理声を絞り出したのでございます。

「死、んで……たまる、か」

文字通り血を吐きながらの言葉。声を出した事で腹からの出血は激しさを増し、更に青年の意識は混濁していくのです。

麻痺し始めた感覚の中、それでも体が震えるのだけは感じます。

ただ、その震えが寒さからなのか、それとも己の「生きたい」と言う欲求からなのか、はたまた少女の冷たい言葉に対する憤りからなのか、青年には分りません。

——やりてえ事も、してえ事も分らねえ。必要としてくれる奴はおるか、オレと言う存在を覚えていてくれる奴もいねえ——

「こんな、ところで………独りでなんて、死ねるかよ」

それは本当に声に出た言葉だったのか。もはや青年にも分らない中、それまで冷たく見下ろしていただけの少女が、自身の脇にしゃがみ込み……そして、囁くように言うのでございます。

「……死ぬ気は無いと言うのなら、その命、私が拾おう」

「な、にを……」

今までの冷たさを全く感じさせぬ声音に、青年はぼやけ始めた視界の中、必死に相手の顔を見ようと目を凝らすのです。

それまで逆光だったはずの彼女の表情が、その時だけははっきり

と見えた気がします。今にも泣きそうな……それでいてひどく優しいな笑みでございました。

それを見た瞬間、青年は視界だけでなく、意識にも霞がかかるかのようにぼやけていきます。

そしてその事に気付いたのか、少女は彼の白銀色の髪を小さな指で軽く梳き……

「独りきりは、寂しいからな」

薄れていく意識の中で聞こえた声もまた、彼が今までにかけてもなかった事がないほど優しい色を湛えており……

……………

落ちる感覚と浮き上がる感覚。相反する2つの感覚に揺さぶられるようにして、青年……銀彌はぼんやりとその目を開くのでございます。

外はまだ夜の闇の黒で染まっており、明け鳥の声も聞こえません。ゆっくりと身を起こした瞬間、ズキリと腹の「古傷」が痛むのを感じて、ようやく先程まで見ていた物が己の過去であった事に気付くのでございました。

「……………夢、か」

苦笑気味に呟きながら、彼は寝汗でべたついた髪をかき上げると、先程まで見ていた夢の欠片を追うように、視線を自身の古傷に向けるのでございます。

腹部に残る、引き裂かれた様な痕の残るそれは、銀彌の捨てた過去の残滓。

「随分とまた……懐かしい夢だったな、オイ」

拾われた「あの日」と同じ、師走の寒さにぞくりと身を震わせながら。銀彌は空に浮かぶ有明の月に目を向けるのでございました。

「よ、永倉のにーさん。仕事中心かい？」

文久3年も暮れ、大晦日の近い26日。京の街を巡回しております

した永倉に、茶店から出てきたばかりらしい銀彌がにこやかに声をかけたのでございます。

珍しい事に彼の近くにあやめも水菊もおりません。いつもは「島原の男衆」として芸妓や舞妓、更には禿の護衛のような事をしているだけに、1人きりで歩いていると言う事は滅多に見ない光景でございます。

「よお銀彌。今から島原方面への巡察予定だ」

「お、良い感じじゃねえか。オレもこれから島原へ帰るんだ。付いていかせてもらいまさあ」

その方が色々と安全そうだし、と付け加えながら、銀彌は他の隊士や街の人の目も気にせず、永倉の横を歩き始めるのでございます。そんな彼の行動に苦笑はしている物の、永倉も然程嫌がっていないのでしよう。無理に引き離すような真似は致しませんでした。行く方向が同じなら、一緒にいてもさして変わらないと言う事もございました。

ですが……永倉の脳裏に、ふとした疑問が過ぎり。彼は隣で上機嫌な様子を見せて歩く銀彌に顔を向けると、その疑問を口にしたのでございます。

「そう言えば銀彌、どうして百花さんの置屋にいるんだ？ 以前聞いた話だと、恩があるって言っていたが」

そう。以前、まだ新撰組が浪士組として京にやってきたばかりの頃。

酒の席で暴れる不逞浪士を取り押さえに向った際、先に取り押さえていた銀彌の強さに感銘を受け、永倉は浪士組への勧誘を行った事がございます。しかし彼は、今の置屋に恩があるからと言って丁重にその誘いを断っておりました。

見た目は17、8の立派な若者でございますし、それなりに人生経験もある事は想像に難^{かた}くないのですが、何があつたのかと言うのは気になるところではありません。

そんな永倉の好奇心から来る質問に、銀彌は特に気を悪くした風

でもなく記憶を辿るように宙を見つめて口を開くのでございます。

「実はオレ、お嬢に命を拾われたんでさあ。お嬢がいなきや、今頃とつくに野垂死んで屍を晒してましたよ。そんでもって、瀕死の俺を看病して、置いてくれたのが『縁屋』だったって訳で」

拾われた当時の事を思い出したのか、銀彌はクツクと楽しげに笑いながら更に言葉を続けます。

「とは言え、拾われた当初はお嬢を殺そうと何度も試みたもんでねええ、そりゃあもう挑んでは踏まれ、また挑んでは踏まれの繰り返しでした」

「はあ！？ そりゃまた……随分と恩知らずな……」

「……あの頃は、周りにいる連中全部がオレの敵、って思ってたからなあ。今じゃ良い思い出って奴で、当時を反省しつつ、仕事に勤しんでまさあ」

頓狂な声を上げる永倉に、やはり楽しげに笑いながら銀彌はそう答えるのでございました。

命の恩人を殺そうとしたと言う事実には、ほんの少しの憤りを感じた事もありますが、何よりも今の銀彌からは、あやめに刃を向けるなど想像出来ぬものであった事も驚きの要因でございました。

そんな彼に気付いていないのか、銀彌は宙を見たまま、一瞬だけ自嘲めいた笑みを浮かべ……

「でも、皮肉もいいトコだ。血の繋がった家族ですらオレを見捨てたのに、赤の他人……それも天敵とも言えるお嬢が、俺を助けてくれたなんて」

「……天敵？ 銀彌とあやめちゃんか？」

銀彌の独り言めいた言葉を聞きとめた永倉が、不思議そうに軽く眉を顰めて問うのでございました。

銀彌があやめを殺そうとしたとの言葉も信じ難い物でございますが、天敵であると言う言葉もまた、今の彼らの関係を見るに想像出来ないのです。

少なくとも、永倉の知る銀彌は……表向きはあやめを「小娘」、

「ガキ」と呼んでからかう「ちょっと嫌味なお兄さん」ですが、その実は彼女を「お嬢」と呼び慕っている忠実な部下であるように思えるのです。

そんな永倉の表情こそが不思議なのか、銀彌もまたきょとんとした表情で首を傾げ……しかし一瞬後、その理由に思い至ったのか、ぽんと手を叩くと悪戯っぽく笑って言葉を紡ぐのでございました。「ああ……そう言えば、永倉の……さんの前では、オレ、ともに戦った事無かつたんでしたっけね。ビックリしますぜ、オレの本気を見たら」

確かに、永倉は未だ銀彌がまともに戦う所は見えておりません。初めて永倉が「闇の者」と遭遇した際も、その力の一端は見た物の、あやめが「暴れるな」と言って止めておりましたし、先日の方沢鴨暗殺の一件では、永倉は現場にいなかった為、彼がどのように戦うのかは存じません。

知っているのは、やたらと身軽である事と、あやめが彼を「番犬」と呼び、戦闘面において信頼する程の実力の持ち主だと言う事くらいで……

そんな事を考えている内に、いつの間にか一行は島原入り口である大門の前に辿り着いておりました。

その脇では銀彌と同じ島原の男衆らしき人物達が、軽く笑いを浮かべながら、戻ってきた銀彌に声をかけておりました。

「銀彌はん、今夜の大門の番、よろしゅうに」

「やつべ、今日だったっけか？ すっかり忘れてたぜ、ありがとよ」

「ああ、やつぱりそうだったかあ。声かけて正解やったなあ」

「やつぱりって、あのなあお前ら。オレの事を一体どういう目で見てんだよ？」

「どんな目えて……こんな目えどす」

「うっわ。超殴りてえ……」

口ではそう言いながらも、どこか楽しげなのはやはり相手が仕事仲間だからなのでございましょうか。

——そう言えば、銀彌も島原の人間なのに、京言葉じゃないよな？

島原の住人は、本来の生まれがどこであろうと「京生まれ」と言う事になっております。それは働く男衆も例外ではなく、往々にして皆京の言葉で話すのが慣わし。それ故に、聞きようによってはべたついた印象を受ける彼らの言葉遣いが、永倉はいまひとつ好ましく思えないのでございます。

しかし、銀彌の言葉には、微塵も京らしい部分がございません。発音も、言葉遣いも、こちらの言葉にあわせる気が無いのか、限りなく江戸の言葉に近い喋り方をしております。

とは言え、完全な江戸言葉と言う訳でもなく……どこの地方の出か分からないと言う点においては、島原らしい喋りとも申せるのでございまして。

——そう言えば、銀彌はいつ頃から島原にいるんだ？ 最近……って感じじゃないが……

ふつ、とそんな疑問が永倉の中に生まれ、そしてそれを言の葉に乗せようとした次の瞬間。

絹を裂くような女性の悲鳴が、その場に響いたのでございます。

「ひったくりや！ 誰か、捕まえておくれやす！」

その声に真つ先に反応したのは、銀彌。そしてそれに一瞬だけ遅れるように永倉も反応すると、ピンとした空気をその場に張って声の方に向って視線を巡らせたのでございます。

そこにいたのは、荷物を取られて地面に倒れこんでいた芸妓の女性と、それを尻目にして駆けてくる2人の男。一方が持っている荷物は女物。恐らくは倒れこんでいる芸妓の物でございましょう。

それを見止めるや、銀彌はギロリとその2人の男を睨み付け……

「おーお。この島原で、しかもこのオレの目の前で不埒を働こうなんぞ、いい度胸じゃねーの」

パキパキと指の節を鳴らしながら言うと、次の瞬間には地を駆け、荷物を持つ方の男の眼前に立っていたのでございます。

——早い……！——

見ていた永倉がそう思う程の速度。当然ひったくりの2人も同じ事を思ったのか、慌てて方向転換しようと地面を蹴るのですが、その前に銀彌の拳が相手の鳩尾に入るのです。

「ぐぶうっ！」

「げはっ！？」

くぐもった声を上げながら体を折る2人の不埒者に追い討ちをかけるように、銀彌は男の手から荷物を取り上げると、一方の男には顎を蹴り上げて身を仰け反らせ、もう一方の男には上げた足を利用して踵落しを見舞ったのでございます。

狙ったの蹴りだったのか、2人並んで地に伏す不埒者の前に立つと、銀彌はニヤリと笑いながら、彼らに声を投げたのです。

「お兄さん方、駄目だぜえ？ この島原にや、オレがいる。……両手両足をへし折られなくなけりや、反省してとつとところから失せろ」

「……はっ！ どうせ借金形の形に売られた女の荷物じゃねえか」

「どうせ連中は自由に使えねえんだ。だったら俺らで有効活用してやったほうが良いってモンだろ？」

ドスの利いた銀彌の言葉に、しかし不埒者は反省の色も見せず……それどころか、開き直るかのような事を言ったのでございます。

その言葉を聞いた瞬間、大門の側にいた男衆達の顔がさつと青褪めた事に気付いたのか、永倉は自身の職務も忘れてこそつとその男衆に向け、囁くように問うのでした。

「どうした？ そんな顔して？ ……何か不味い事でもあるのか？」

「あかん……あきまへんて。銀彌はんに向ってあないな事……」

「ああ……最近はずいぶん平穏やったのに……血の雨が降りそうやわあ……」
ガタガタと震える彼らを訝しく思ったのも束の間。すぐさまその理由を、永倉も理解したのでございます。

それは、銀彌の体から迸る、痛々しいまでの殺気によって。

顔からは表情らしい物は消え、今は完全な無表情。それが殺気と

相まって、ぞくりと身を震わせる程の冷たさを放っておりました。

「この荷物を失くす。それでこの姐さんが背負い込む借金が増えるって分かってやってんだよなあ？　そんでもって、その借金を返す為に何年年季明けが遠のくかも、分かってんだよなあ？　分かって奪おうとしたんだよなあ？」

言いながら、銀彌は荷物を奪った方の男の腕に軽く足を乗せたかと思うと、次の瞬間にはゴキリ、と言う鈍い音を響かせたのでございます。

同時に響く男の悲鳴。そして、もう一方の男が、仲間の腕を折られたのだと気付いた時には、己の腿に銀彌の足が乗っており……やはり直後、先程よりも更に鈍い音が響いたのでございます。

「痛えか？　痛えよなあ？　けどなあ、年季明けが遠のくって事は、姐さん方は肉体的な痛みの方がまだマシって地獄を更に味わう事になるんだ。テメエら……いつそ死ぬか？　死んで詫びるか？　ああ？」

銀彌の声に、本気の殺意を感じ取ったのか。流石に男達も彼が危険と悟ったのか、目にうつすらと涙を浮かべ、必死の形相でその場から逃れようともがくのです。

しかし、着物の裾を銀彌がしっかりと踏んでいる為に動く事も叶わず、端から見ればただジタバタと無駄な抵抗をしているようにしか見えません。

流石にこれ以上は不味いのだと判断したのでございましょう。男衆の1人が、男達の側でひよいと屈み込むと、この地の男衆特有の嫌味な笑みを浮かべて囁くのでございます。

「お兄さん方、知りまへんか？　この人、銀彌はんって言うんやけど」

「……銀彌？　銀彌って……あの銀彌！？」

「気にいらねえ奴は片っ端から噛み殺すって噂の、『島原の狂犬』！？」

男衆の言葉に慄き、2人の不埒者は上擦った声で言いながら、自

分達を見下ろす銀髪の男に視線を向けます。

その顔は先までの無表情とは違い、男衆と同じ嫌味ったらしい笑みが生きており、改めて彼も「島原の男衆」なのだと感じさせるのでした。

「狂犬、ねえ……一応オレは心優しい番犬のつもりだぜ？　生かしておいてやつてるんだからよ。……今の所は」

「ひっ」

脅しにしか聞こえない銀彌の言葉に、小さな悲鳴を上げる男2人。銀彌はそんな彼らの襟首を掴んで軽く持ち上げると、思い切りその2人を大門の外へ投げ捨てると、親指で己の首に線を引きような仕草をとって怒鳴りつけたのでございます。

「うっぜんだよ、ドサンピン共が。2度と島原に足踏み入れるんじゃないねえっ！　次にその面見せた時は……その喉、噛み千切る」

その声が、果たして彼らの耳に届いていたかどうか。男達はヒイと悲鳴を上げると、すたこらさっさとその場を後にして逃げていったのでございました。

その背を見送り、ようやく冷静さを取り戻したのか、銀彌は大きく息を吐き出すと、被害に逢った芸妓をそつと立たせ、心配そうな視線を送るのでございます。

「よお、明里姐さん。怪我とかねえか？　盗られたモン、大丈夫か？」

「へえ。おおきに銀彌はん。せやけど、相変わらずあんたはんも物騒どすなあ。水菊はんやあやめちゃん心配するの分るわあ」

明里というらしいその芸妓は、苦笑交じりに礼を言うのでございました。

帯に縫いこまれていた刺繍から、百花の置屋の者では無いのでございましょうが、銀彌の事も、そして水菊やあやめとも仲が良いのか、舞扇でペシリと彼の額を小突くのでございます。

「島原で刃傷沙汰はご法度。忘れた訳やあらしまへんやろ？　あんたはんが事を起こしたら、迷惑被るのは水菊はん達なんえ？　それ

こそ、年季明けがぐつと伸びてしまいかも知れまへん」

「……すんません、マジで反省してます」

「頭に血い上ったら、周りが見えんようになってまう癖、早う直した方がええんと違います？」

「返す言葉もねえや。つか、ウチの小娘と同じ事言わないで下さいよ、明里姐さん」

先程までの恐ろしさはどこへ消えたのか。銀彌は眦を下げ、苦笑いでひたすらに額を小突かれ続けるのでございます。

それは、自身の額を小突いている舞扇を持つ手が、微かに震えている事に気付いているからなのかもしれません。

「心配だから置屋^家まで送ってやりてえけど、年の瀬だろ？ オレも早く戻らねえと、女将さんにどやされちまうからなあ……」

「ああ、なら俺達が……」

「それなら、私がお送りしましょう」

永倉が「送る」と言い切るよりも先に。いつからそこにいたのでしょうか、永倉の背後からひよいと顔を覗かせた男性が、にこやかな笑みを浮かべて言の葉を放ったのでございます。

一見すると寺子屋の先生のような、優しげな風貌。その様子は、腰から下がる刀が、不似合いに思える程。

ですが、その人物が見目通りの存在で無い事は、永倉も……そして銀彌も存じております。

新撰組総長、山南敬介。副長である土方と並び、局長である近藤勇を支える者。そして銀彌にとつては、いつぞや「破壊魔」と相對した際、あやめを口封じに殺そうとした腹立たしい存在でもございます。

「サンナンさん！？ な、なななな、何でここに！？ いつから！？」

「来たのは先程です。実は、その文具屋で墨を買っていたのですが、悲鳴が聞こえたもので。駆けつけた時には、既に解決していたようですけれども」

そう言つてにこりと笑う山南に、永倉は困つたように眦を下げて後ろ頭を掻き……

「あー、サンナンさんの気配に気付かないとか、隊長としてどうなんだよ俺。まーた平助や左之にからかわれるんだぜ」

「ふふ。相手が私で良かったですね。……さて永倉君は巡視の最中でお忙しいのでしょうか？ そちらの方もお忙しいとの事ですし……お嬢さん、私でよろしければ送らせて頂けませんか？」

「へえ。ほなら、よろしゅうお頼申しますう」

山南の浮かべる穏やかな笑みに安堵を覚えたのか、どこか硬さは残っている物の、明里もにこりと笑つて頭を下げると、彼に付いていく様にして自身の置屋へと歩き去つていくのでございました。

……この時に生まれた縁が、後々まで尾を引く事になるとは……誰も予想せずに。

所変わつて揚屋、「縁屋」の前。さかさかと箒で道を掃いていたあやめは、肌に落ちてきた冷たい感触に、ふと空を見上げたのでございます。

そこに広がるのは鈍色の雲。そしてその雲からは、真白の欠片がひらひらと舞い落ちてきております。

「……雪、か。道理で、いつにも増して空気が冷たい訳だ」

舞い落ちる白を掌に受け取りながら、彼女はほうと小さく溜息を吐き出すのでございました。

吐き出された息も、外気の冷たさで白く濁り、時折急ぎ足で前を抜けていく芸妓達も、どこか寒そうに身を竦ませているのが見えます。

——そう言えば、銀を拾つたのもこんな風に寒い日だったな……——
寒さのせいか、唐突にその事を思い出し、あやめはくすりと軽く笑むのでございました。

——今日と言う今日こそ死にやがれ小娘エエエエっ！——

出会ったばかりの頃は、置屋の迷惑を顧みず、毎日のように大暴れをする銀彌相手に、毎日彼の頭を踏みつけていた事も思い出されず。

あの時の彼は、「独りではない事」を実感したかったのでは無いかと思っておりますし、今でもそうだったのだと、あやめは思っております。

あやめに襲い掛かる事で、自分は独りでは無いと。随分と屈折した認識の方法ではございますが、当時の彼はそうするしか知らなかったように思えます。

——随分と成長したものだ。今の奴からは想像出来ん——
ふふ、と小さく笑いながら、再度手元の箒を左右に振り始めた刹那。

懐かしい思い出に浸っていたのが悪かったのか、唐突に角から現れた男が、箒の先を踏みつけたのでございます。

「え？」

「お、わ、おおっ!？」

箒を引く力よりも、男が踏む力の方が強かったのでございましょう。箒の先は、ほんの少しだけあやめの元へ戻ろうとした物のそれ以上はピクリとも動かず、油断していたあやめは体勢を崩し、その場でぐりと膝をついてしまうのです。

一方で箒を踏んだ男も、予期せぬ出来事に僅かに体勢を崩したのか、数歩後ろへ向ってたたらを踏むのでございました。しかし、あやめのように転ぶ事はなく、何とか己の体勢を立て直すと、その男は膝をついているあやめに気づき、慌てたように手を差し伸べるのでございました。

「おお、すまんの。怪我はないかい？」

「……へえ。うちも少し、ぼんやりしてましたから」

訛りから推測するに、土佐の志士でございましょうか。背は銀彌と同じくらい高く、腰から提げた刀はあまり使われた様子はありません。

相手の顔を見るにしろ、子供らしい身長しかないあやめでは、見上げる形になってしまいます。

——長時間話すには、首が痛くなりそうな相手だな——

そんな風に思うあやめに気付いていないのか、相手はあやめと「縁屋」を交互に見比べ……そして二カツと笑うと、問いを口にするのでございます。

「おんしゃー、ぎつちりはこの店におるのかえ？」

「うちは禿どすえ？ お姉さんが呼ばれたらここには来ますう。ウチのお姉さん方は、このお店にはお世話になつとりますさかい、お掃除させて頂いとりますんえ」

——と言つか、何故そんな事を聞くのだ、この男は。……童女趣味か？ それとも誘拐目的か？——

笑顔で答えを返しながらも、あやめは心の中では不信感を募らせます。

仮に本当に童女趣味であるにしろ、沖田と同じただの「小さい生き物好き」であるにしろ、警戒するに越した事はございません。

前者の場合は色々と問題を感じますし、後者の場合は沖田と言う前例もある為、命の危険を感じるのでございます。

そんな彼女の警戒に気付かず、相手はふむと小さく頷くと、更に問いを重ねたのです。

「この店は、『一見さんお断り』か？」

「そんな事おまへん。どなたでも歓迎してますえ」

「ほうかほうか。……良え感じの店じゃ。今日はい^{無理}かんやけど、近い内に寄らせてもらいたいものぜよ」

心の底からそう思っているのか、うつとりと目を細めながら「縁屋」を見つめて言う相手に、あやめの中にある不信感はますます強くなるばかり。

浮かんでいる表情は爽やかなのに、あやめにはその爽やかさが妙に気に入らないのでした。

——本当に「爽やか」なのか、それともそれを装っているのか——

穿った物の見方をしているとは、重々理解しております。

ですがどうにもあやめには、目の前の男が、何かとんでもない事をしでかすような予感がしてならないのでございました。

……それも、悪い方向で。

無意識の内に睨み付けそうになるのを堪えながら、作った笑顔で是非にとだけ答えると、箒を拾い上げて「縁屋」の中へ戻るべく踵を返したのでございます。

そんなあやめの背に、駄目押しと言わんばかりに男は声を上げるのでした。

「俺は才谷梅太郎じゃ。次に会った時は『梅さん』と呼き^{呼んでくれ}くれ」と
と……

その8：文久4年、睦月・壺

年が明けた文久4年。干支は巡って甲子、肌寒さも何とはなしに和らぎ始めた睦月。七草の節句を翌日に控える夜。

台所では、あやめが明日の七種粥作りに向け、仕込みや見習いの者達の陣頭指揮を執っております。

「ご存知やとは思いますが、明日は『人日の節句』です。日頃お世話になっているお母さんと御姉さん達に、今年も一年健康でいてもらう言う願いを込めて、こちらで七種の用意をしますえ」

張り切っているあやめに触発されているのか、はたまた彼女の氣迫に圧されているのか。彼女を「ただの禿だ」と思っているにも関わらず、仕込みも見習いも、皆あやめの指示に従っててきばきと動いております。

七種粥を食すのは、邪気を払い万病を防ぐ呪いの意味が強くあります。

勿論、豪勢ではある物の、冷たい御節料理ばかりを食していたが故に、疲弊した胃の腑を休めると言う効果もございます。……春とは言えど、まだまだ寒さの続く季節。温かい食べ物に恋しくなる時期なのでから。

俎板の上に、用意した七種……芹、薺、御形、繁縷、仏の座、菰、蘿蔔を乗せ、集った彼女達は囃し歌を歌いながら、それらをトントコと軽やかな音を立たせて切っているのです。

「あやめちゃんは、ほんに楽しそうだなあ」

「時節や伝統は大切にしたいと思うてますさかい。あ、そうや。銀彌はんの粥は『春の』やのおて『昔の』を使いますよって、別に作りますう」

有名な七種は、七草粥として食す「春の七種」と、秋に月と共に愛でる為の「秋の七種」を指すのですが、その他にも「七草」と呼ばれる物がございます。

それが、先程あやめが口にした、「昔の七種」。米、粟、稗^{ひえ}、黍^{きび}、胡麻^{ごま}、小豆、養米^{みの}の七種を用いた物もまた、「七種」と呼ばれているのでございます。

「また、えらく古典的どすなあ。銀彌はん、何ぞあかん物でもありますのんえ？」

「あのお人、葱と菊があかんのどす。御形と仏の座は、菊の仲間どすやろ？ 昔食べた時に、凄く苦しみはって」

「あらまあ……」

「昔食べた時」の事を思い出したのでございましょう。あやめは哀しそうに眦を下げて、問うてきた仕込みの1人にそう返すのでございまして。

事実、銀彌が最初にこの置屋で七種粥を食した際、何やら口から泡を吹いて苦しんだのです。後に聞いた所によれば、葱と菊は体質的に受け付けないとの事。それ以降、彼には一般的な七種粥ではなく、先に挙げた「昔の七種」で作った粥を与えているのでございます。

「案外、可愛いトコあるんどすなあ銀彌はん」

「うちも、そう思いますう。銀彌はんで、どこかちよつと怖いなあて思つとつたんどすけど、それ聞いたら何や普通のお人やなあつて」「そうそう。ちよつと目付きも鋭いし、『島原の狂犬』なんて呼ばれてはるし」

怖いとは言いながらも、彼の弱点を知つて少し安堵したのでしょか。台所にいる娘達の顔には、楽しげな微笑が浮いているのでございまして。

勿論、銀彌が自分達を嫌っている訳では無い事は知っているのでしょう。ですが、あやめや水菊のいない場所での彼は、ひどく無口で同時に奇妙な威圧感も持っており、銀彌をよく知らない仕込みや見習い、そしてあやめ以外の禿の娘には、少々怖い存在なのです。そう思われている事は、あやめも、そして銀彌本人も知っております。

だからこそ、あやめはこの日……睦月の六日の夜だけは、台所で陣頭指揮を取り、銀彌の「情けない部分」を晒して、親しみ易さを作ろうとするのでございました。

彼を、「独りきり」にしない為にも。

夜は明け、人日の節句当日。

睦月、そして節句と言えど、お座敷の仕事はございます。

今宵も「縁屋」では、上弦の月と水菊の三味を着に、永倉、藤堂、原田の3人が、酒……ではなく、茶を嗜んでおりました。

昨年しねんの文月ぶんげつに、永倉と共に来て以降、原田と藤堂もまた、「縁屋」に顔を出すようになっていたのでございます。

無論、永倉ほど頻繁に通う訳ではなく、むしろ他の揚屋の料理に飽きた頃に、「縁屋」へ来ると言った風でございました。

そんな彼らの目の前には今、あやめ達が作った七種粥しちしゆあはが置かれております。

それは、「酒ばかりでは体の疲れも取れなかつた」と言う「縁屋」側の配慮さいびもありますが、何よりも彼らが最初に所望したのがこの「七種粥」だったのでございました。

椀わんの中にある、白と緑。七種の香りが湯気に乗って淡く彼らの鼻をくすぐり、それだけでも日々の疲れが癒されるような気が致します。

その香に癒された結果なのか、はたまた何か別の要因があつたのか。その粥をじっと見つめていた3人が、やがてポツリと、感極まつたような声を漏らしたのでございます。

「……………新さん、左之さん。まともな七種だよ」

「屯所とんじょで出たのは、まともから程遠かつたからな。……………色んな意味で」

「ああ。アレはやマズイ。……………これまた色んな意味で」

「そこまで言う程の事やつたんどすか？」

死んだ魚のような濁った目で遠くを見つめ、空笑い混じりに吐き出す彼らに水菊は軽く首を傾げながら問いかけたのでございます。

七種粥は、料理としては然程難しい物ではございません。勿論、料亭に出す程美味な物を、と言うのであれば通常の何倍もの手順を必要とするのでございましょうが、百花の置屋で作ったそれは至極普通の物。

感動されるようなものでもないはずなのですが……

「言う程の事だったんだ。新さん達も言っただけど、そりゃあもう色々ね。その中でも一番の難点は、お粥なのに何故か米の色がやたらと青かったって事かな。おかしいでしょ？」

「入っていた葉の色も、無駄に明るい桃色でよお。世の中にあんな物体が存在したのかと言いてえ」

「思い出させるな、平助、左之。アレは食べ物じゃない。……一種の兵器だ」

シヨッキングピンク

コバルトブルー

無駄に明るい桃色の葉に、やたらと青い色の米。……確かにそれは想像するだけでも食欲を損ないそうな色合い。それを目の前に出されたなら、確かに青褪めるのも理解出来ます。

そもそも、どうすれば米がそんな色になるのかと疑問に思わなくもないのですが、それを聞いてはいけないような気がして、水菊は口元に微苦笑を浮かべるのみに留めるのでございました。

世の中には、知らない方が良い事が山程あると言う事を、彼女もよく存じておりますので。

そんな彼女の顔を、藤堂は手元の七種粥をかき込みながら眺め……ふと思いついたように言葉を口にしたのでございます。

「そうそう、お姐さんに会ったら聞こうと思っていただけださ」
「へえ、何どすえ？」

言いながら、藤堂はその身をすつと水菊に寄せると、その視線を水菊……ではなく、廊下に控える禿の1人に向け、囁くように言うのです。

「あの禿の子って、あんな顔してたっけ？ ほら、あやちゃんの横

の子」

流石に指をさすのは憚られるのか、顔と視線、そして口で水菊の視線を誘導しながら、藤堂はやや困惑の混じった表情であやめの隣に立つ禿の少女を見つめるのです。

禿のような幼子は、成長が早く少し見ない間に雰囲気が変わる事などよくある事。それに、芸妓や舞妓に比べて印象に薄い為、藤堂本人と致しましても、記憶違いと言う可能性を否定出来ないのだからですが。

「どれどれ？ ……前からあんな感じの子じゃねえか」

「左之さんには聞いてないよ。そもそも左之さん、禿の子見分けつかないでしょ？ あやちゃんの事だって、認識してるか怪しいし」

「流石にそこは知ってるつつうのっ！ この姐さんにくっ付いてる禿の子だから……アレだろ？」

「当たってるけど、人をアレとか言って指差すのやめなよ左之さん。失礼だから」

軽く顔を顰め、諫めるように言う藤堂に、原田の方は気にした様子もなくびしつとあやめを指差したまま、その指を彼女の隣……藤堂の言う「禿の子」に移動させて、まじまじと見つめるのです。

とは言え、藤堂の言うように禿の見分けはつかないのか、うーんと低く唸りながらその童女を見つめ……やがて諦めたのか、盛大な溜息を吐き出すと、頭を掻きながら小さく「わからねえ」とだけ呟くのでございました。

同じ様に永倉もちらりとその童女を見やりますが、これと言って特に何の違和感もございません。藤堂達よりもこの揚屋に通い慣れている分、藤堂の感じている変化に気付いていないだけかもしれないかもしれません。

ですが、水菊はそうは思わなかったのでしょうか。彼女はひくりとその頬を引き攣らせたのでございました。……その時に浮かべた表情は、どう表現すれば良いでしょうか。憎悪と憤怒、そしてほんの僅かに怯えが混じったような、複雑な表情……と言うのが、最もし

つくり来るかもしれません。

とは言え、それもほんの一瞬……それこそ刹那よりも更に短い間の事。すぐにいつもの芸妓としての顔に戻すと、軽く小首を傾げて曖昧な返事を返すのでございました。

「女の子は成長が早いから。うちには……何とも言えまへん」

「本当に？ うーん、俺の気のせいなのかなあ……」

水菊の否定を素直に受け取ったのでしよう。藤堂はいまひとつ釈然としない様子を見せながらも、視線を件の禿から外すと、水菊の側を離れて、己の七種に箸をつけるのでございました。

それに倣うかのように、永倉と原田もそれぞれに箸をつけ、水菊は軽く目を伏せて再び三昧を鳴らし始めるのです。

指が覚える程に弾き込んだ調べは、幼い頃から置屋で寝起きしてきた証。女衞に売られ、見知らぬ女を母と呼び、そして強制的に芸を仕込まされた己の境遇を、恨んだ事が無いと言えは嘘になります。稽古事の帰り、何の苦労も無く笑う街の娘を見る度に、彼女達に嫉妬し、羨んだ事も当然ございます。

「島原の女」と言うだけで、男達は好色そうな目付きで自身の体を見やり、その視線に吐き気をもよおす事も多々。幾度「芸を売るのだ」と申しても、所詮島原も「花街」。中には芸だけでなく体も売る者がいる事も存じておりますし、そうしなければ年季が明けない者がいる事も重々承知しております。

己も、芸を覚えなければ、百花が母でなければ、そして……あやめと出会わなければ、彼女達と同じ道を歩んでいたかも知れないのですから。

島原の……いいえ、花街の女なら誰しもが思う事。それを、藤堂が指した禿の少女は願ひ、そして応えてしまったのかもしれませんが。

「……………」『取替へばや』」

「え？」

びいんと弾かれる音色に紛れて乗った水菊の小さな呟きは、側にいた藤堂の耳に届いたのでしょう。不思議そうに軽く首を傾げ、反

射的に聞き返すような声がその口から漏れるのです。

ですがそんな彼に、水菊はふるふると首を横に振ると、ふわりと
つくり笑顔を浮かべて……

「……いいえ。何でもおまへん」

答える気は無い事を暗に示し、それ以降は押し黙ってしまったの
でございました。

笑みの下……視線をずっと、あやめの横に立つ禿の少女に向けた
まま……

そして殊更に夜は更けて。座敷ではぼんやりと月を見上げる藤堂
と、その後ろでは酔い潰れでもしたのか、顔を朱に染め高たかい軒で眠る
永倉の原田の姿。

そんな彼らの騒が聞こえていたのか、それまで廊下にいたあやめ
が座敷の中へそつと入り、奥に用意してあった布団を2人に向かっ
てそつとかけるのでございました。

「ゴメンねあやちゃん。新撰組ウチの飲兵衛のんべえ2人が迷惑かけて」

眦を下げて言いながら、藤堂は重そうに布団を引き摺るあやめを
手伝います。

布団を敷き、寝こける永倉と原田を藤堂が布団に向ってごろりと
蹴り飛ばし、乗った所であやめが掛け布団を掛ける。その連携のお
陰で、男2人は座敷の片隅に追いやられ、後に残るは先程まで飲み
食いに使っていた膳と銚子、そして藤堂とあやめと言った、少々変
わった取り合わせでございました。

水菊は、別の座敷から呼び出しがかかったからと申し訳無さそう
に藤堂に告げ、四半刻ほど前に座敷を出て行っておりまして。

代わりの芸妓を呼ぶと水菊は言ったのでございますが、その頃
には既に永倉も原田も出来上がっており、唯一素面だった藤堂が、丁
寧にそれを断ったのでした。

「あ、そうだ。あやちゃんにも聞こうと思ってただけだよ」

「へえ？ 何ですえ？」

「さっきまで君の横にいた禿の子なんだけど……あんな顔だったかなって思ってた」

散らばった銚子を拾い上げるあやめに、藤堂も手伝うように拾い上げながらそのように問いかけると、彼女のは心底不思議そうに首を傾げるのでございます。

自身の横にいた禿と言うと、確か別の置屋で寝起きしている「ひなた」と言う少女だったと記憶しております。

置屋が異なれば顔を合わせる機会も少なく、覚えている顔もぼんやりとしたものでしかありません。

芸妓、舞妓であれば、まだあやめも覚えていられるのでございますが、仕込みや見習い、禿までは流石に数が多すぎて記憶しきれないのです。

特に島原のような花街は、日々女が売られてくるような場所。その全てを覚えるなど、如何に400を超える齢を経たあやめであれ、流石に不可能でございます。

名前は知っているが、顔までは正確に把握していない。それがあやめの、ひなたに対する認識でございます。

「ひなたちゃんの事ですか？ うーん……うちも忙しゅうしてましたさかい、しっかり見てまへんどしたけど……いつも通りやと思いますえ？」

「じゃあ、やっぱり俺の気のせいだったのかな。ちょっと違和感あったんだけど」

「違和感？」

「うん。何て言うのかなあ……目が、変だったんだよ。ちょっと蒼かった色に見えたって言うか」

藤堂が吐き出した言葉に、銚子を拾っていたあやめの顔が、微かに強張ります。

——蒼がかった目、だと？ そして、それに気付いた？——

そんな風に思いながら、ちらりと横目で藤堂を見やるも、彼の方

はその視線に気付く事なく、頭を掻きながら更に言葉を重ねるのでございました。

「多分、気のせいだね。その事は気にしないで」

「……へえ。他に気になる事ありますえ？」

「気になる事？ うーん……あ、『取替へばや』って、何の事が分るかな？」

「普通に考えたら、『取り替えたい』言う意味ですけど、何でそんな事いわはるんどす？」

「これは水菊さんが言ってたんだ。何かよく分らないけど、俺の中で凄く引つかかってさ」

水菊が言った。

その一言に、あやめは何を思っただのか、強張った顔を更に引き攣らせ……そして心の中でのみ、舌打ちを鳴らすのでした。

それは恐らく、水菊が他の座敷に呼ばれたと言うのは嘘であり、彼女1人で決着をつけようとしている事が分ったからなのかもしれない。

——「取替へばや」だと？ チツ、菊の様子がおかしくなる訳だ。気付かなかった私も迂闊だが……——

己の迂闊さを呪いながらも、あやめは大きく息を1つ吐き出すと、極力普段通りを装って藤堂の顔を覗き込むのでございます。

水菊の事は無論心配でございますが、あやめが今から追ったところで彼女の行方は分りません。ならば、彼女の事は「番犬」である銀彌に任せ、今は視線の先にいる相手をするが先決と思ったのでございましょう。

自分すら感じ取れなかった「違和感」に気付いた、藤堂の。

「ん？ どうしたの、あやちゃん？ 俺の顔、何か付いてる？」

「……なあ藤堂はん。昔、誰かを『羨ましい』て思ってた事ありはるんと違う？」

「え？」

「そのお人が持つてる物、全部欲しいて。自分とそのお人、何もか

も『取り替えたい』で、強く思つた事」

真つ直ぐに見上げるあやめの瞳に、藤堂は微かに困つたような笑みを浮かべたのでございます。

ただ、不思議と彼女の問いを不快とは思いません。それどころか今まで誰にも言つた事のなかった、過去の己の胸の内を打ち明けても良いのではと言つ気分になつたのでした。

「……うん。あるよ」

持つていた銚子を、空いている膳の上に乗せると、藤堂はストーンとその場に座り込み、あやめの顔を真つ直ぐに見つめ返してから大きく頷きを返した後、その時の心情を言の葉に乗せるのでございました。

「俺さ、親父が誰かわからないんだよね。一応、どこかの藩主なんじゃないかつて話はあつたけど、金はやるから調べるな、みたいな事言われて。だから………ああ、子供の頃だよ？ 父親がいる奴が羨ましかった」

言いながらも半分の月を見上げる彼の顔は、懐かしそうでもあり、寂しそうでもあり……そしてどこか哀しそうにも見えるのでした。

親がいらないと言つのは、この島原ではある意味当然の事。ですが、島原の「中」の常識と、「外」の常識が異なる事くらいは、あやめとて重々承知しております。

きつと彼が晒されたであろう好奇の眼差しは、島原の女が向けられる物の何倍も屈辱的な物だったのでは無いでしょうか。

……あくまで、あやめの予想ではございますが。

「ははっ。今考えると情けないよなあ。島原や吉原の姐さん達の方が、もつと酷い目に遭つてゐるって言つのに」

「………良う、踏み止まりましたなあ」

「うん。もう本当に、いつそ別人になりたいって思つた時、試衛館に着いた。でも、そこにいたらいつの間にかそんな気持ちはなくなつてたんだ。取り替えたいって気持ちを忘れるくらい、楽しかったから」

そこで言葉を一旦区切ると、彼はちらりと部屋の片隅で眠る永倉達に視線を向け、心底嬉しそうに微笑んだのでございます。

恐らくはそれこそが、彼が「踏み止まった」理由なのでしょう。

永倉や原田、ここにいない土方や山南、そして沖田や斉藤など彼にとつて「取り替え難い存在」、「取り替え難い居場所」が手に入つたからこそ、彼は「闇の者」へと墮す事なく、今のままであり続けられたのだと。

「俺は、新撰組つて居場所を見つけられた。誰かと立場を取り替えたら、この居場所はなくなるって事だろ？ ……俺はそんなの、ゴメンだ」

月の光に照らされながら。そう言った彼の顔は、とても晴れやかで。

あやめは微かに、作っていない笑みを口の端に浮かべて、彼の顔をじつと眺めるのでございました。

——後の問題は……菊と銀に任せるより他、あるまいな——
心の内で、そう呟きながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1212y/>

宵闇奇譚 —幕末異聞—

2011年11月24日18時07分発行